364
362

28. 3. 08

外16146
乙
X364-362

海兵物語

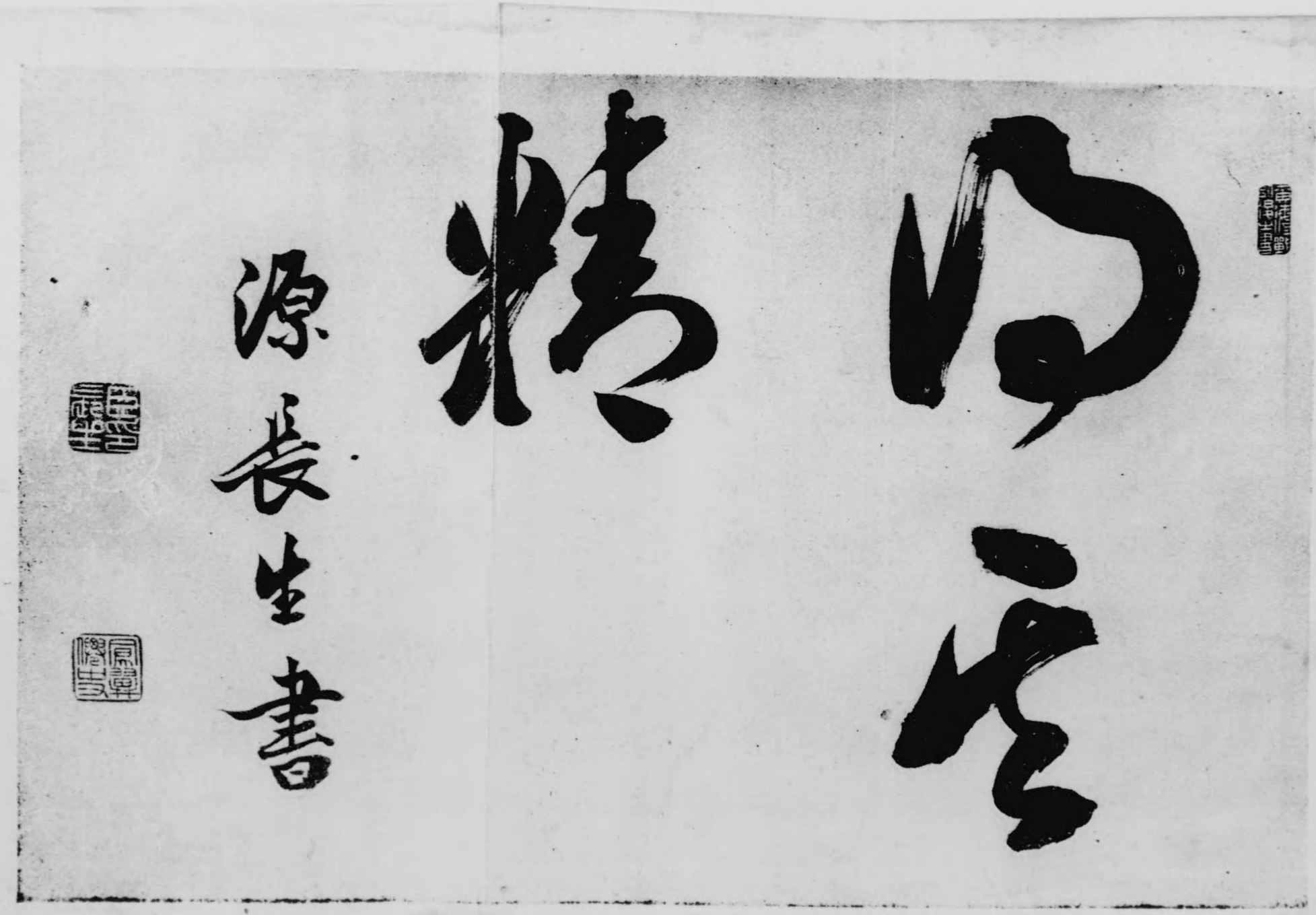
三

浦濤平著

大正
6. 12. 17
内交

海軍少將子爵小笠原長生閣下題辭

源長生書



海軍少將子爵小笠原長生閣下題辭

波に咲く花

——海兵の歌——

一、洋々湛ふるこの潮は　颯々吹き來るこの風は
廣き宇内をめぐるなり　外國々を渡るなり。

二、その波に浮くこの御艦　これ我家ぞ奥津城ぞ
竿頭高く飜るる　御旗の光り仰ぎつゝ。

三、昨日は北の氷の海に　今日は南に熱海の
荒き波風何かせん　われは皇國を護るなり。

四、見よ紅のうるはしく　腕に開くこの櫻花を
風ふき狂ひ雨すさび　冬さり來も散らばこそ。

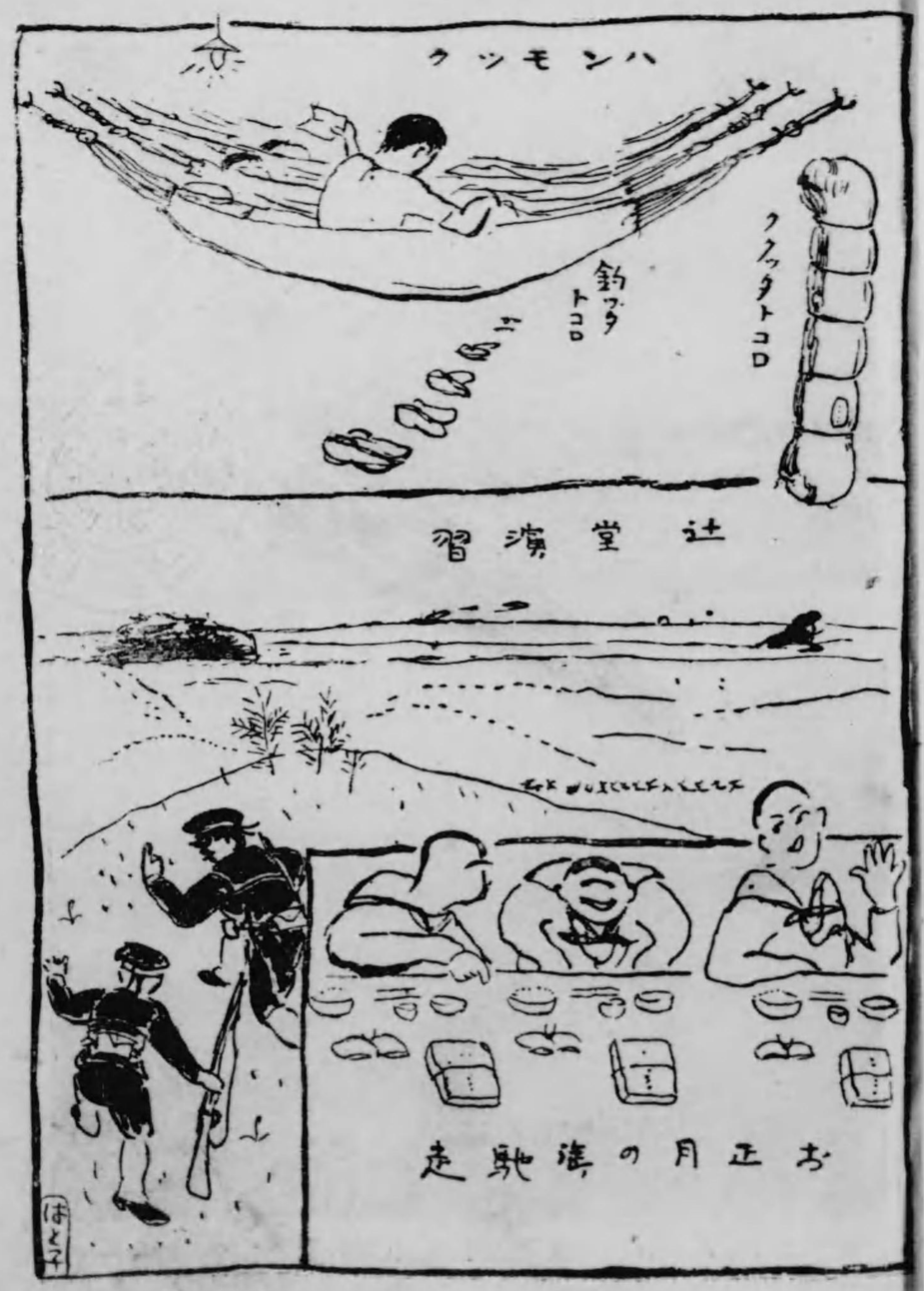
五、されど一度時あらば　艦諸共に潔よく
大和櫻の散り際を　見せん男子の象徴なり。

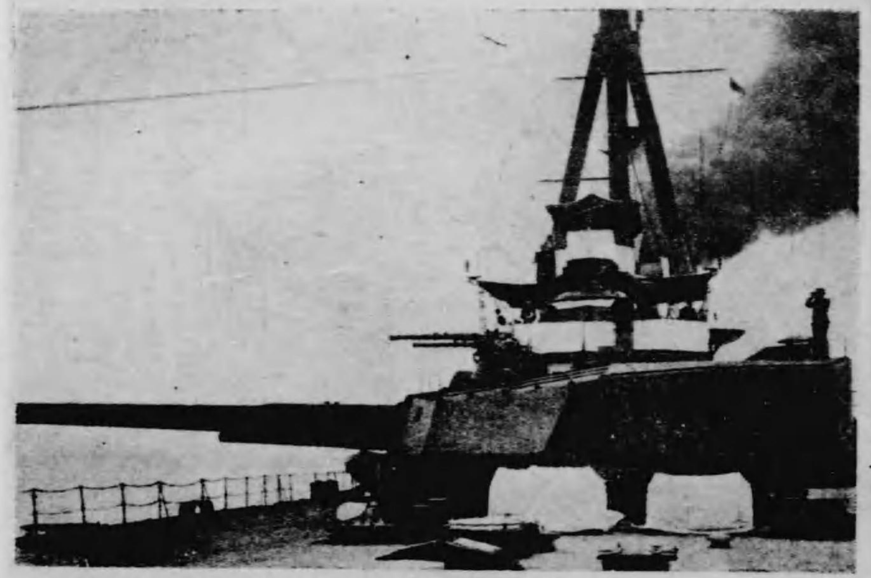
六、これぞ我等が任務なる　これぞ我等の誇なる
見よ美しきこの櫻花を　仇にはちらぬこの花を。

——三浦濤平作——

巡洋戦艦の高速力航行　（剛金）

驅逐艦の高速力航行　（桐）

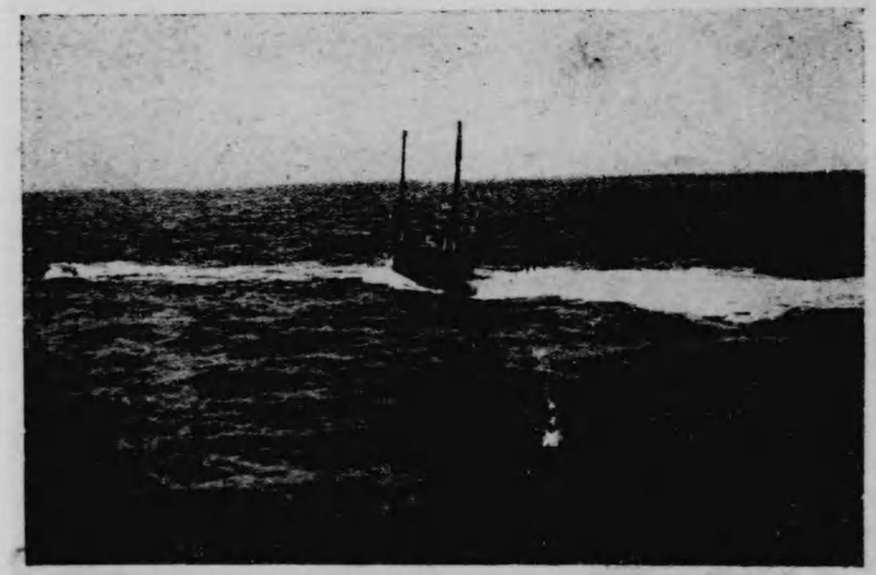




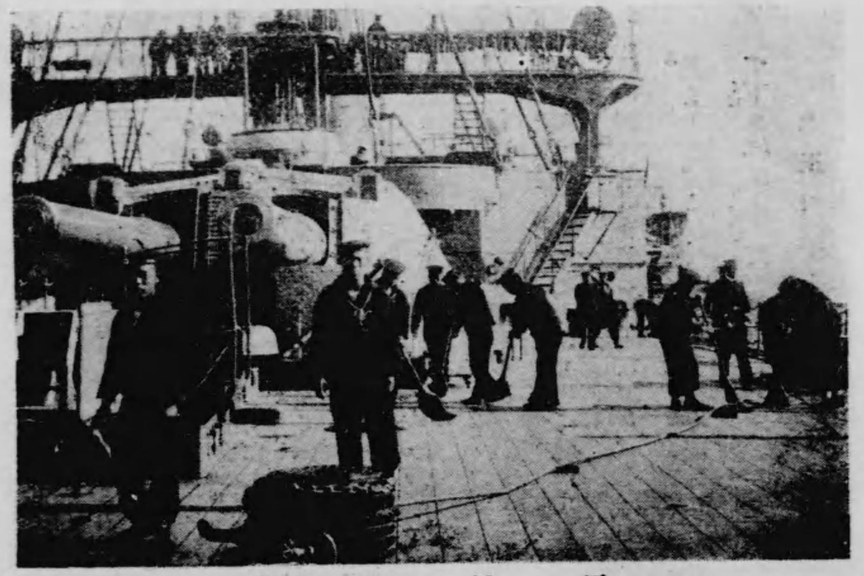
合戦準備整備

戰鬪

掃海艇集合

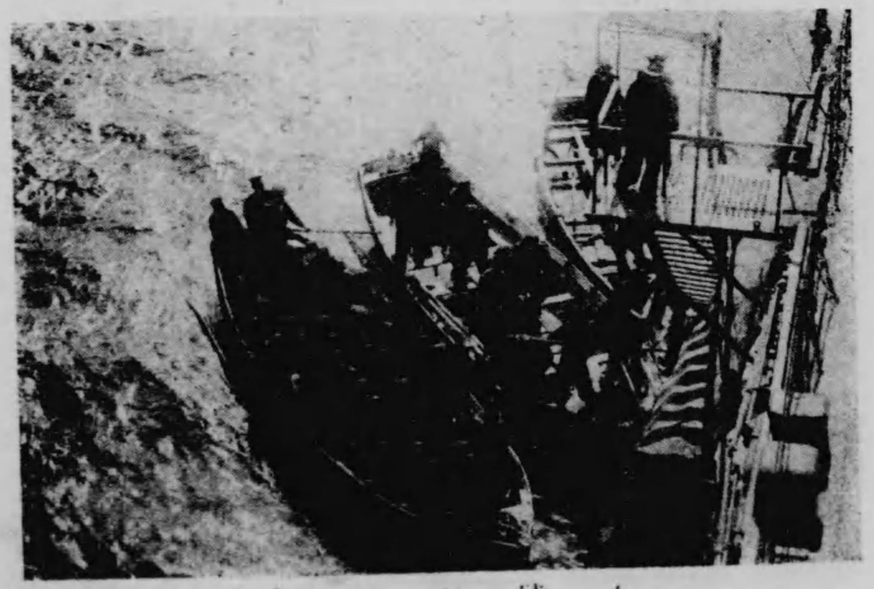


潜水艇出石（第十二圖）

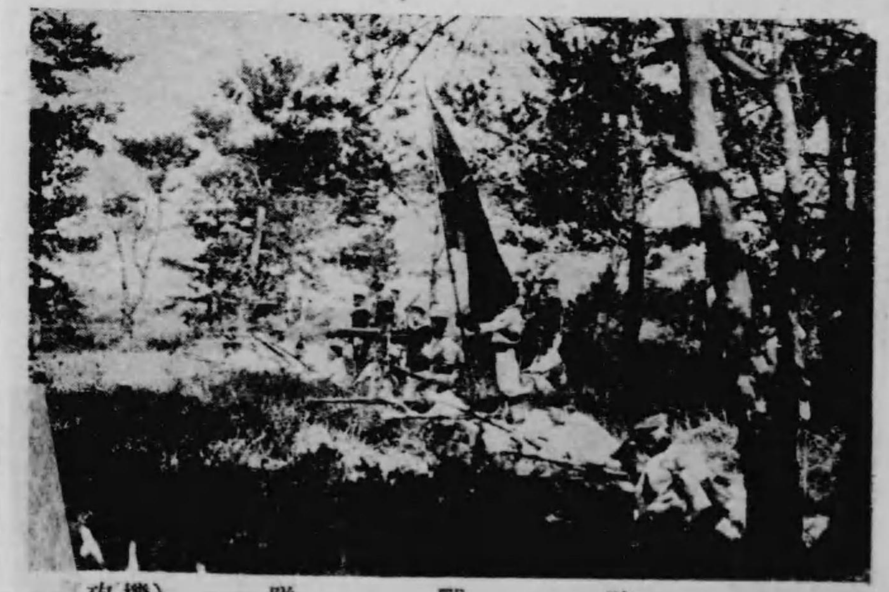


甲板掃除

艦砲操練（四吋七砲）



上陸ポート



陸戰隊（機砲）

序

『海軍の兵隊は毎日どんな事をして暮して居る』

私が海軍の下級の一卒としての四年間に、此質問を懸けられたのは幾度だか判りません。その度に私は變な心持――何だか馬鹿にされたやうな――になるのでした。我日本の世間と云ふものは全くそれ程海軍と云ふものに理解をもつて居ないのです。が、それも無理のない事で、海軍と云ふものは陸軍と違つて一般の國民と接觸の度が少く、全く離れた形になつて居るからです。それは一部の識者の間には數字の上などでは種々と研究されて居るでせうが、海兵の日常生活の狀態等に就いては全く知られて居りません。『海國の民』と謂ふ我國人は最う少し海軍と云ふものに就いて知つて置いて頂きたいと思ひます。で、私は自分が微兵の四年間の貧弱の經驗ながら、それを基として新兵入團から滿期までを順を追ふて書いて見ました。これでとても全部を盡したとは云れませんが、海兵生活の一端でも知る事が出來て下されば幸だと思ひます。

大正六年十月

著者

目次

海兵團生活

入團の日
下士卒はどうして養成られる―門出の祝ひは鯨の生燒け―未知の世界へ―佛か鬼か―海軍の匂ひ―今日から俺の子だ―海兵の全財產―同じやうな顏ばかり……一

ハンモック
芋虫みたやうな格好―釣床は浮標の代用もする―新しい毛布の匂ひ……一五

教班長
陰となり日向となつて―十三人の人の親―始めて舊兵として接する人……一九

練兵場の朔風
基本教育―懷しい薄日―此垣一重が鐵の―同鄕の人―課業止めの喇叭……二五

海兵團のお正月
振返る兵舍の板目―取つて二十二才の子供―大晦日の夜―初小言でもあるまいと―參飯の舊態以然―教班長の言を信じて―壯嚴な遙拜式―これで屠蘇があつたら―お祝ひの三河萬歲……三一

菓子一袋
定量の外は得られぬ—野性の表現—『菓子許し』—情が仇—悲惨事……四

課業
軍人精神の基本—水兵の卵だ—櫻やポプラの芽がふくらんで—艦砲と運用術—鵜呑的に—冗慢な日本語—端艇漕法—一家水入らず—海水を嘗めて見た組……四七

愉快な演習
新兵の願—牡丹餅が旨いぞ—注意の數々—春の歡喜に滿ちた野の途を—輕い空放の銃音も—舍營—巡檢後の騒ぎ—警急呼集—辻堂の名物『芳』の講評……五五

卒業
携帶履歴—後悔先に立たず—君は何艦へ—卒業式—酒保へ行つてもいゝか?—海兵團もお別れ—もう休暇の話—最後のお小言—敵れ武士死……六六

軍艦生活

乘艦
眞箇の新兵生活—配置表—配員番號—右舷直左舷直—戰闘配置—食卓—新兵の教育—『艦の兵員とし』—分隊長—分隊附將校と先任下士—艦内旅行—『階段は駈歩』—これからは腕次第—『分隊から整列』—進級試驗實務點數—始めて錨のマーク—さん附けにしてくれる人が來た—殿は附けない海軍の呼び方……七五

一艦一家族
一艦を家とし—『我艦』—海兵の特色—一家族の成立—艦長と副長—航海長と信號科掌帆科船匠科—砲術長と掌砲科—水雷長と水雷科—軍醫長主計長—機關部—士官室士官—士官次官士官—甲板士官と長附—特務士官—下士卒の住所—トモの方とボールの方—一艦の組織一例……九〇

艦内諸役員
當直將校と副直將校—衛兵司令と衛兵隊—衛兵伍長—番兵の守所—時の鐘—當直割—先任衛兵伍長—取次—從卒—中下甲板掃除番—内舷掛—外舷掛—守燈番—塗具掛—砲塔當番—水雷艇小蒸汽艇員—厠番ト艦底掛……一〇二

勇しき諸操練と雜業
臨戰準備—合戰準備—戰闘—敵艦捕獲—陸戰隊—水雷防禦及其他諸操練—一心異體となつて—操練の三要項—雜業……一一〇

『食事用意』と『酒保開け』
飯を炊く兵隊—食器—食卓番—下士卒一日の食料—所謂十毎一の法—嗜好食—栄養

の一室に隨喜の涙―酒保で賣る品物―酒保の組織……一一五
『上陸用意』の喇叭の嬉しさ
上陸の遲い艦は元氣がない―入湯上陸と半舷上陸―散歩上陸―上陸割―泊り番と歸り番―軍服に着更える心地―上陸員の點檢―上陸札―海軍下士卒集會所―海兵の下宿生活―公平なる組織―克働克遊主義―海軍の美點……一二一
俸給日と進級日
附纏ふ船乘氣質―『俸給受取れ』―下士卒俸給額―下士卒諸加俸―一等水兵の小使帳―誘ふ水あれば―風習を打破せよ―進級日―進級申渡―お茶を挽くと云ふ事―進級祝ひ―下士卒進級停年……一三一
海上の水の價
何の皮肉？何の教訓？―上陸の第一義―顏を洗ふ水は五合内外―艦の風呂―何れが贅澤か―貴重な蒸溜水―驟雨浴び方―大昔を其のまゝ―雨水の眞の姿―海兵の洗濯―あゝ淡水が欲しい……一四三
土曜日と日曜日、休日――端艇競漕
大掃除―日曜日―分隊點檢―人員調査―休日の午後―艦上の相撲と遊藝許し―大祭祝日―端艇競漕―海軍で使ふ端艇の種類―實用の爲めの競漕―猛烈な應援……一五一
艦の『一日』
多岐な水兵の仕事―總員起しまで―忙しい朝の十分間―甲板洗ひ方―艦内の禮―賑かな朝食後―軍艦旗揚げ方―海軍々人覺悟の基礎―日課手入―其日の仕事―軍事點檢―別科―『一日の終り』―初夜巡檢―波の音を聞きつゝ―軍艦の週課……一五八
元氣の消長を表す石炭積
人足ではない―煉炭の一個にも―元氣鼓舞の一手段―百鬼夜行の姿―あゝ眼が開いた―石炭積みの序幕―前進の喇叭で―石炭積感念―煉炭と和炭―一家眷屬には見せられぬ―元氣消長の表れ……一七三
出港、航海、入港
『行先我家』で―出港準備―救助艇―『出港用意』―艦隊出港の壯觀―航海の狀態―苦樂一髮の差―海兵の權威は洋中にあり―入港用意―綠の陸へ……一八五
樂しい休暇
冬夏季休暇―航海休暇―休暇用意―待つうちが樂しみ―もどかしい時計の針―乳を呑んで來るさ―西に東に―あゝまた號笛の音―土產話の種々に……一九四
艦の正月と四季
除夜の鐘も街の灯も―繭艦飾―遙拜式―お鏡餅の丸い輪廓が―甲板に撒いた水がす

ぐ凍ろ二月―砲塔の眉に陽炎がもえて―梅桃と散り―忙しい五月―補充交代―山時鳥初鰹―暑熱は足袋の裏から―酷暑日課―前甲板の納涼―氣まぐれな蟋蟀―十一月は年度の終り……二〇三

滿期

一卷の繪まきの如し―滿期用意―滿期風―他が滿期者にして吳れる―男であれば二一六

退艦――思出の海兵團へ

帽章を返すも淋しい―懷しい室内の光景―氣に喰はぬ先任下士が―『總員滿期者見送れ』―此の舷梯―さらば我艦よ―思ひ出の海兵團へ―四年前の人達―教部長の苦言―最も新しい在郷軍人ぢやないか―滿期休暇……二二〇

退團――現役解除

服役成績書―退團式―軍樂隊に送られて……二二八

驅逐艦生活

苦樂の極致―驅逐艦の種類―驅逐隊の組織―驅逐艦の任務―痛快なる襲擊運動―涙と戰つて後に―靜かな航海の快味―氣ばつな號令―驅逐艦乘氣質―驅逐艦で困る事―驅逐艦乘の德……二三一

海兵の種類、等級、特技章識別

或る水兵の會話

――下士卒集會所に於ける――

海兵團生活

入團の日

下士卒はどうして養成られる―門出の祝ひはコノシロの生燒け―未知の世界へ―佛か鬼か―海軍の匂ひ―今日から俺の子だ―海兵の全財產―同じやうな顏ばかり

月桂樹に抱かれた錨の徽章、二の腕に黑綾で渦卷を表した軍服に、黃金造りの短劍を佩かせ給へる同樣武士――海軍將校の勇しくもまた瀟洒たる軍服姿が、海國男子の羨望の的となり、我も我もと江田島さして馳せ參じやうとするのは無理ならぬとであるが、偖士官許りでは戰は出來ぬ其手ともなり足ともなつて盡忠の誠を致す下士卒こそ「力」の表現である。といふ事は今更ら言ふ迄もないことである。

廂の無い軍帽に「大日本軍艦何々」と金字で書いた帽章に、藍地に白線一條を縁取つた涎掛（本名を中着と云ふ）見たやうな物を背に負ひ、蛙股の太い袴の輕快な其の姿！。眞夏の陽を受けてキラ〳〵光つた蒼海を背景として、鮮かな軍艦旗の下に働いて居る水兵姿を思ひ給へ。

雨の晨、風の夕、千尋の水底の上を住處とする者には、人知れぬ苦しさがある。樂しさがある。

その海の强者は奈何して養成られるか？、我國では徵兵制度と志願兵制度との二途がある。徵兵は普通の適齡檢査によつて、身體强健で海兵に適すると認められた者が命ぜられ、志願兵は滿十八歲以上で志願し、學術試驗、體格檢査に合格した者が命ぜられる。徵兵は現役四年、志願兵は六年で、徵兵は陸軍と同じく十二月一日、志願兵は六月一日各所轄軍港の海兵團に入る。海兵の新兵期は二期に分れて居て、第一期はこの海兵團の五等卒時代の五ヶ月で、茲で海軍一般何處へでも通用する類型的な一個の兵に仕上げられて各艦に配乘せしめられ、第二期に入つて四等卒となつて六ヶ月、今度は舊兵の中に立混つて、其艦々の氣分、組織に合つた兵に仕上げられ、茲でまづ一人前となつて新兵と云ふ氣が脫けると云ふ譯である。それから三等卒二等卒と順序停年を踏んで下士となり、再役して成績が良ければ上等兵曹兵曹長までは昇れるのである。

海兵團時代は舊兵の中に入らず、新兵許りで特別な敎育訓練を受けるのであるから割合に暢氣であるが、規則が嚴重であるのと、物質的供給が不足なのとで第一の苦痛時代とされてある。これは今まで放縱な生活をして來た者が始めて嚴肅な軍規と云ふものに接するので左樣感ずるの

であらう。

『まア御大事にお勤めなすつて。』『國の爲めでムいます。た目出度うムいます。』とお爲めごかしの餞の言葉に送られて、入團前日には續々軍港に集つて來る。停車場には腕に赤切を捲いた兵隊が居て夫々指定された宿屋を敎へて呉れる『〇〇聯隊區何十何名』と筆太に書いた札の出た薄汚ない宿屋には、不安相な顏や愉快相な顏が集つて來る。

今宵一夜が浮世の見納めと哀つぽく、市中見學と出懸ける。夕方になると何處からともなく出て來る無數の海兵に茫然して居ると打突き合ふ位。どれもこれも一樣に獰猛な面付、中には酒の機嫌の千鳥足で道を緯經に歩いて居る者もある。あゝ自分も明日からこんな連中の中に入つて行つて、さて奈何事をされるのだらう？、と氣の弱い者は先づ度膽を抜かれる。

宿に歸つて來て、汚い蒲團にくるまつても、さて寢られない。近く枕に響いて來る浪の音、幽に聞ゑる軍艦の時鐘もばかに哀つぽい音律である。翌朝は早く眼が覺める。これで當分は蒲團にも寢られぬのだと思ふと、この薄汚い蒲團の溫氣も何となく懷しいやうな氣がする。五燭位の電燈がポツカリと埃に曇つて、時計はチクタクと運命を引張つて行く四邊はまだ薄暗く、工廠の起重機が怪物の如に明方の空に突立つて居る雲の樣に北の方から街の上に流れて來るのは軍艦の烟であらう？　往來は最うゾロ〳〵と人が通る。

『大勢樣ですから、どうぞお早い方から二度に食つて頂きます』と白

粉を毒々しく塗つた女中達は毎年の事とて馴れ切つて居て、今日から新兵さんぢやないか』と云ふやうな扱ひ振りが第一癪に觸る。『これでも生家に歸りや若旦那樣だぞ』と威張つて見た處で事實其の通り新兵さんなのだから仕方がない。こんなスベタ女中にまで馬鹿にされるのかと悲觀しながら食膳を見ると、箸を着けると生々しい血の滴るやうな生燒けの鰶が一尾に淡い豆腐汁。此魚の小骨の多いのは食物にも此樣に刺があると云ふ謎かい、と變に氣を廻す者もある。

飯も濟んで皆仕度をする。『皆さんお草履をお穿きになつた方がご便利でムいます』と暗い長火鉢の前で女將が馴れた調子で言ふと『今日から最う下駄も要らないんたなあ、生家に持つて歸す程の品でもなし、癪に觸つた家だけれど呉れて行かう。』と女將の策戰にまんまと引懸る。軈て白い脚袢を着けて劍を下げた番兵ざんに伴れられて出かける。

種々な地方に、各人個々の心を持つて生活して來た若き人々、家を捨て、父母を置き、鄕と別れ、重き使命を帶びて來り集りたる人々、堅き其の覺悟はあらう。が、今迄自分を包んで居た柔い空氣の中を出で、『軍隊』と云ふ凄しい名を有つた未知の世界に入つて行く、と云ふ處に一つの不安はある。

葉の落ちたポプラの若木が草籬を立並べた如に三方を圍むだ廣い練兵場には、その若人達と附添人とて充滿して居る。『何々區』『何々郡』と各自の出身地名を書いた赤や青の札が、皆其胸間に付けられてある。禮々しい羽織袴に前ノメリの表付と云ふ若旦那、偉大なそして荒くれた松瘤の如な手を持つた百姓の息子、また突懸草履の職人風、潮風に磨き上げ

られた漁夫らしい皮膚の色、夫等は今日限り一様に海兵服を着せられて心までの入替をやらねばならぬ。人々の間を短劍を下げた士官や、腕に赤切を卷いた兵曹などが行來する。あの所謂我々の上官たるべき人は果して佛であらうか？鬼であらうか？と云ふやうに、眸は一様に其人達に向つて注がれる。軈て府縣別に立付けられて順次に體格檢査を受ける檢査は適齡檢査の時よりも綿密で、茲で刎られる者もある。中には、嫌く〳〵で來た者でも不合格となつても決して喜ばぬ。多大の餞けと期待とお祭騷ぎで送つて呉れた鄕人に對しても、顏向けが出來ないからである。

體格檢査は朝から夕方まで懸る。其間に晝食も給される。これが抑々入團第一回海軍の飯の喰ひ始めである。柔道場の廣間を假の食堂で配食が整然と出來て居る。瀨戸ひき鍋の手柄のない如な金腕の、大の方には葱と牛肉、小の方には七三位の割飯、も一つの湯呑樣のものには澤庵が三片許り、恐々箸を握つて、口元に持つて行くと食器の中から一種異樣な——生臭いやうな油くさいやうな——匂ひがムッと鼻を衝くので少々躊躇となる。

——この嫌な匂ひの飯を四年の間食はねばならぬのか？、思へば毎朝母の炊いてくれた温い割飯と鹽辛い味噌汁が戀しい——なと女々しい事を考へて居る者も、三日經ぬうちにこの海軍の匂ひに馴らされて、甘くて甘くて毎食事用意の喇叭が鳴るのが待ち遠しくなると云ふとは、其時は夢さら思はぬ。

檢査の濟んだ者は個々、練兵場の眞中の繩張の中に入つて行く、其處には貴重品預り所と書いた札が立つて居る。此所で時計とか金とか、新

兵に不必要な貴重品を凡て預けられて了ふ。『澤山の人の中には惡い人も居るかも知れない。それは決して肌を離しちやいけない。』と母親から堅く云ひ含められて來た者でもあらう。お守札入の財布を出し澁つて居ると、『決して心配しなくていゝ、取つて了ふのぢやない。お前が卒業して軍艦に乘つて行く時とか、また必要の場合には何時でも返してやる。』と首に大な袋を掛けた兵曹はニコニコ笑ひ乍ら姓名を書いた札を附けて袋の中に入れて了ふ。次には赭い色の短靴が山の如に積んである。

『お前は足袋は何文か？。』『十一文半です。』『恐しい大い足だな。此靴を穿いて見ろ。これはあとで自分で墨て染めて穿くんだよ。』と此處でも親切。

『お前が〇〇か？　ヨシ今日から俺の子になるんだ、おとなしくしろ俺の顏を忘れるな。サア服を渡すから跟いて來い』と、其の人に連れられて兵舍に入つて行く。廣い板敷で、最中が通路になつて居る。兩側に卓子が無數に並んで居る。硝子戸から入つて來る光線は最中に來る頃には薄らいで、薄暗い事、宛然寺のやうである。

『これがお前の食卓で卓員は十三人、俺がその教班長でこれからお前達の凡を指導する。』と教班長は嚴に云ひ渡して何處かへ行つたかと思ふと、一個の袋を擔いで來た。『これは衣囊と云つてお前の着物が全部入つて居る。お前が卒業して艦に乘つて行く時にも毛布と一緒に持つて行くのだ。それから滿期までお上から拜借して居るのであるから大切にしなくちやいけない。ほら見ろ、軍服三着、夏服三着、事業服――これは仕事をする時着るんだ。さう軍服許りは着て居られないから――。中着

二枚――これは、それ涎掛見たいなものだ――』。

海兵の全財産（水兵の部）

他の兵種も軍樂生などのそく外はこれと概同樣

衣嚢　軍服三着、夏服三着、事業服三着、冬襦袢二枚、夏襦袢三枚、袴下二着、中着二枚、中着襟二枚、外套一着、雨着一着、軍帽二個、襟飾二枚、靴下六足、靴二足、腹卷一、食器大中小一組、箸、メス紐二本、折メス一挺、クロストップ一束、帽覆三枚、外套紐一本、

釣床　毛布三枚、藁蒲團一、藁蒲團覆一枚、

手箱　書籍、日用品を入れて置く小な箱

官給品はその所持點數を失つた時は理由によつては辨償しなければならぬ。また各々所持期限があつて、其度に新品と交換して貰へるのである。

教班長の細々の説明も何が何やら判らぬがソロ〳〵責任が重くなつて來たことだけは判る。

それから愈々お召更えとなる。今の世にはもう袴を前後に穿くと云ふやうな者はないが何事も始めてなので教班長は却々世話がやける。襦袢袴下の着け工合、襟飾の結び樣。それは〳〵邪慳な繼母も及ばぬ程の親切。軍隊と云ふ處は棒を呑んで話をする處、『高等監獄』だなぞと、忌しい習慣的觀念に促はれて居に者は、己が不明を愧づると同時に薄氣味が惡くなつて來る程である。

『未練の殘らぬやうに何もかも生家に返してしまへ。褌だけは仕方がないが。』と教班長の言に、浮世の思ひはそつくりそつと、脱ぎ捨てた着物に包んで附添人に渡す。

『あゝ立派な水兵になつた』と附添人が笑つて居る。着なれぬ服が變な事、喜しいやうな悲しいやうな氣持ち。

卓員が十三人が揃ふと身長に依つて名前順が定まる。

『……』『ハイ！』『ウムお前だな。上官からものを言はれた時は何時でも不動の姿勢をとるんだ。それは漸々と教へるが……偖これだけの人――十三人が一個の教班だ第〇分隊第△教部第××教班、忘れるな。食卓は何十何番卓。お前達は今日から兄弟になつたのだから仲よく援合つて行かねばいけない……早く顔を覺えてしまへ。』と。ジロ〳〵と見交して、これが今から苦樂を俱にして行く人達かと、誰を見ても同じ樣な顔をして居て薩張譯が判らない。

四年！　その第一日も曉て暮れて行く。浮世に別るゝ淡い愁みが、不覺にも混亂した胸を襲つて來る。

ハンモック

芋虫みたやうな格好―釣床は浮標の代用もする―新しい毛布の匂ひ―

海兵と云ふ者は釣床と云ふ物に寝るものだとはかねて聞いて居た。それは夏の暑い時木の蔭などに吊つて、本でも讀み乍らブラリ〳〵と遣つて居る。あの網で作つた暢氣なやつと同じであらう。などゝ云ふ想像は茲で直ぐに打破される。海軍で使う釣床なるものはズック見たやうな――一號帆布と云つて帆布の中で一番厚いもの――板の様に堅い疊一疊位の大さの兩端に十六宛の穴が明いて居て、それにクリューと云つて細い麻縄を通して吊るものである。それは洗濯する爲めに都合よく出來て居るので、起きた時はレーシンと云つて、別の縄で五所くゝる――丁度芋虫みた様な格好になる。そして釣床格納所に納めるのである。

其のクリューの付方が中々六ケ敷ものので、最中を緩く兩端に行く程つめて、U字形にしないと寝像の惡い者などは、よく夜中に寝返りを打つ拍子に、轉覆して抛り出されることがある。『釣床が上手に付かる様になれば滿期だ』と海軍での諺がある程、それ程六ケ敷いものである。それをキビる――海軍ではくくる事をキビルと云ふ――のも中々滑がつて初めは五分も六分も要るが、馴れて來れば二分と懸らぬ。また堅くキビれと八ケ間敷云ふのは、一つには戰鬪の時艦橋の周圍や、羅鍼儀を圍むで彈片避となり。沈没の場合などには救命浮標の代用ともなるからである。中には毛布が三枚と藁蒲團とが入る。

この新しい毛布の匂ひが鼻について新兵の第一夜は中々に寝付かれぬ

今まで蒲團の中に長々と足を伸ばして寢た體には何んとしても三枚の毛布では足りない。足先から冷い風がスウ〳〵と這入て來る。目を開けば高い天井に暗い電燈が一個、ぽつかりとこの不安の夢を見守つて居る。彼方でも此方でもゴソ〳〵と動いて居るのは矢張り寢馴れぬ苦しさに悶えて居るのだらう。折柄鳴り出す巡檢の喇叭が長く哀音を引いて、これも涙を誘ふ。

父の顔、母の顔、妹の顔、家の有樣、座敷、納戸、佛樣、臺所の鍬掛には鍬の刄が光つて居る。今頃はあの爐の傍で皆は夕飯だらうか？、洋燈の火屋がかけて黑い油煙が立つて居る！、それから門出の日の有樣、庭に樹つた入營の旗、村の人々の顔、汽車の中、宿屋の一夜。それから今日、舊兵の笑顔、敎班長と云ふ人の顔！。

それから先は、あゝ奈何事になるだらう？鼻に付く毛布の匂ひ！　足先から忍び込んで來る寒さ！。眦から流れて耳の方まで傳つて行く熱い涙！。

エ、泣いてどうなるものか、と思つても涙は出る。

誰でもかうした一夜があるとのことである。

教班長

陰となり日向となつて―十三人の人の親―始めて舞兵として接する人―

多種多様な生活から、多種多様な性質を有つて集つて來たこの壯丁幾百、ためつ賺しつ、或は威嚇しつ、兎も角も一人前の水兵樣に仕上るのは中々至難の業である。

それには新兵教育主任（少佐位）があり分隊長（大尉）分隊附將校（中少尉）あり。其他には運用とか砲術とかの教員（上等兵曹）もあるが、直接にあたつて、或は陰となり、日向となつて苦心慘憺、心までの入替えをやつて海軍々人と云ふ一定の型に嵌めて行くのは、新兵教員即ち教班長（下士）の任務である。

一教班は十三人で――それが十五六集つて一側分隊を成して居る――其れを卒ゐる教班長は父でもあり母でもある。朝起きるからねるまで、何くれとなく心を勞する――三日目には上陸するが――自分の部下から不成績者を出したくない。自分の級は各分隊通じてこの最高成績であり たい。と云ふ望みは、情としても、利とする方面に於ても教班長として有するのが當然である。

中には惡い者があつて、御勅諭の『公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれど其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛けよ』と宣はせらるゝ本義を履き違えて、無闇にビンタを飛したり。小言と命令を同時に下したりする者もある。が、そうした教班に限つて成績が上つたためしがない、或は、教班の者の金を預つてやると云つて、集めて置いて卒業

して艦に乗ると云ふ時も、返して呉れない、預けた者は教班長ではあるし、上官ではあるし、と云ふので其儘泣寝入になつてしまつた。と云ふ噂などよく聞いたが、それはまた論外で、數の中にはそうした度し難い者もたまにはあらう、と云つてあきらめる譯には行かぬ。教班長の選抜任用は大に意を用ゐて貰らはねばならぬ。

『教班長、この銃の尾栓が抜けません。』『教班長、襟飾を失くしました。』『教班長、凍傷で痛くて仕方がありません。』十三人の子の親となつた教班長は、各々に安心を與へて遣らねばならぬ。煙草を圏外から買つて來ても呉れる。懐しい故郷からの手紙を取次いでくれるのも教班長。外出の時、集合所に行つても小使がありませんと云へば

『何に使うんだ。アンパンを買ふのだらう。この時だと許りに詰め込んで、腹をこわすなよ。』と云つても、金を貸して呉れる。

『家の事でも何んでも、心配事があつたら俺に言へ、決して悪いやうにはしないから。』と。公私事凡て、教班長を煩はさねばならぬ。寔に海軍生活の上に於て最も純なる心を抱いて居る彼等は、教班長の匙加減一つにある。彼等が海軍に入つて、始めて舊兵として知る事の出來るのはこの教班長たる兵曹である、故に彼等は其の一擧一動によつて、これから先、進んで行く未知の世界を想ひ如何に處すべきかを知らうとして居るのである。

『教班長、艦では毎日どんな事をするんですか、』『私は何んな艦に乗せられるんですか。』『艦は航海すると醉ひますか。』

事業間の休憩の時など、日當りのいい兵舎の板目に倚つた、教班長を

取卷いて、とりとめもない質問に、教班長を困らせるのも、その親みが深かければこそである。

月を追ひ歳を重ねて、其の新兵が立派な一等卒となり、特修兵となつて、艦などで一緒になる事がある。

『やア、最う一等水兵になつたのか、早いものだな、新兵の時はよく俺を困らしたつけか。』と、茲では最う、普通、下士と卒との差別のない會話で話し合ふが、子弟の情、親子の情にも似た、親みが湧いて、種々な美談もある。

練兵場の朔風

基本教育―恼しい薄日―此垣一重が娑の―同郷の人
―課業止めの喇叭

入團式は四五日の内に鎮守府長が來られて行はれる。それから十日間位は、基本教育で、脚袢を着けたまゝ徒手で『氣を付け』の姿勢や、擧手の敬禮法、行進、左右展開などを、毎日教へられる。

『速足行進は勇往邁進の氣象を表す！　と云つて、前に何があらうが突倒して進んで行く勢がなくてはならぬ。』

『元氣がない、最つと股を上げて、瓜先から下すやうに、踏付ける。コウ……一歩の間隔は七十五サンチ。』

漸々と體の格好と共に、軍人らしい心地にもなつて來る。

それから、銃を持たせられて、各個教練から、小隊教練、中隊教練、と進んで行く。

團門から通りに添ふて長方形な、第三練兵場、其所は忘れもしない、入團の際に、整揃をした處である、の人達が最う、一門の兵隊らしくなつて、擔銃や、立銃の練習に餘念がない。前の崖には、何時も人が馬に乘つた形の標的が五つ並んで此方を見て居る。海から渡つて來た、大陸の朔風が、練兵場の砂を捲き上げて、ポプラの枯骨を力強く搖つて、直に前の崖に打つかつて吃驚したやうに散つて行く。一しきり其の砂烟の中に、彼等の白い事業服が活動寫眞の如に動く。

とピリ〳〵と休憩の呼子が鳴る。

『集れ！』『着け劍』『組め銃』『休憩……分れ。』と各教班毎に叉銃休憩。

折々に雲間を洩れる薄日が、この、事業服に襦袢一枚で鼻汁をすゝりながら板塀の側に集つた人々に懷しがられてもまた直に雲に隱てしまう

『オウ寒い〻〻、第一手が凍ゐて小便をしても釦が懸らねえのが困つちもう。』

『これ、こんな手付だ、』と一人は人形のやうな手付で煙草をひねる。

『あゝ、市中ぢやもう正月の仕度だな。』

人々の振向く眸の先に、板塀を越して僅に見える家々の軒には引廻された注連飾や、松飾、歳暮大賣出しと書いた旗などがヒラヒラと暮の風に飜るのが映る、幽に聞える樂隊の囃、凍たやうな大路を小刻みに歩く日和下駄の忙し相な音、轍の音、世は最う、行く年は追はれる人々の吐息にも曇らうとするを、茲は板塀一つ隔てた此處はまた暢氣な、大の男

が砂塵に目をしばたゝき乍ら軍ごつこに餘念がない。

『あゝ、この塀一つ外に出たらばなア……此の垣一重が鐵のか……ハハハ。』とまだ浮世に未練の殘つて居るらしい一人。

『だけど、最う茲には入つたからにや、矢張りやる丈けの事をして早く出た方が、勝だよ、なんて云つたつて。』

『考へ樣によつちやあこんな暢氣な處はあるまい、云ふ通りになつて居ればいゝんだもの。市中ぢや、暮だ正月だつて、目を廻して居ても團内では少し寒いのを我慢して居ればいゝんだもの、米が高くならうが、安くならうが一向構つた事はない。』

『あゝ、今日は最う廿八日か、藥研堀の年の市だな。』

『エ？君は東京かい。』

『あゝ、』

『何處？　月本橋？　日本橋は何處？　橋町！　ヘエ、ぢや僕とこと直だ、僕は、馬喰町だよ。』

『僕は來る時から君を知つて居たよ、宿屋でも。』

『僕はちつとも知らなかつた！』『まお互に仲よくやつて行かうね。釣床でも釣つたら煙草盆の處で話さう。』

こんな事から緒が開いて、今までは互に知らぬ同志、警戒しつゝ顏をじろ〳〵と見て居た者が、日の經つに連れて、言葉一つも交せば、同病相憐むと云ふ格で大の仲よしとなる。それが同縣とか同郡とか云へば一層の事、互に語り、互に笑ひ、日々の欝ははれて、教練も面白みが出て來れば、進みも早い。

喜しいのは課業止メの喇叭、疲れた足を曳ずつて、空いた腹を抱へて兵舎に歸つて行く。

今日の夕飯は何だらう、燒豆腐に鰤の煮たのかな？なぞと見當を付ける位に馴れて來て居る。

舍外で解れて、各自脚袢を脱つて塵をはたく、また一陣の風がサッと其塵を持つて行つてしまう。

と、休憩の喇叭が鳴る。

海兵團のお正月

振返る兵舍の板目―取つて二十二才の子供―大晦日の夜―初小言でもあるまいと―參飯の舊態以然―教班長の言を信じて―壯嚴な遙拜式―これで屠蘇があつたら―お祝ひの三河萬歳

一陽來復の春、またお正月が來たと云ふ。『御目出度う』と云ふ。何が御目出度いのだか考へて見ても判らない。理窟は兎角面白くないものと心得て居る故、御目出度く所謂盲從と云ふ奴にして置く、と云ふのは軍隊の正月も同じ事だが、『元日や昨日の鬼が禮に來る』と云ふ古い川柳も此所では何の關係もない。鬼も來なければ禮にも來ない。至極暢氣に御上は日の丸だいと、澄して居られるのも、全く御威光の餘慶と、有難く感銘しては居るものゝ、さて羽織袴で改つて、一家一同、『まづ明け

まして』と云つた生家の有様を思ひ出して、振返る兵舎の板目はあまりに冷たく、あまりに暗い。と云つてしまつてはいかにもつまらな相であるが、それでも相當に正月の氣分が流れ込んで來る。團門の番兵が何程嚴い顔をして居ても『時』と云ふ偉大な力はどん〳〵は入つて來る其邊へも何日か松飾がたてられる。と、『は、成程正月が來るのだな。』と人々は一寸妙な顔をする。只自分で勝手に正月の來ると云ふ氣分を作つて、首を長くして待つて居る者がある。それは新兵諸君である。取つて二十二歳を數ふ無邪氣な子供である。

軍隊第一回の正月、それは、どんなであらう、生家に居れば、あゝもし、こうもしたものだが、團内ではどうであらう。餅は食はせるかしら、屠蘇は飲ませるかしら？、と無事に一日を終つたとなれば、さて食ふ事より外考へない子供達には無理もない事である。

釣床の中から、マジ〳〵と暗い天井を瞶めて居た一人は急に首を擡げて、

『オイ――小川？　今日は何日だ！。』

『何んだ、吃驚するぢやないか、今日は二十四日サ。』

『二十四日だな？　二十五、六、七、八、九、三十、三十一、一日、まだ八日あるな。』

『何んだい？。』

『なに、元日まで何日あるか數へて見たのさ。』

他の一人も、これはまた俺も大事件を忘れて居たと云ふやうに、數へだす。』

『課業は二十九日迄で、三十日には大掃除だつて云つたよ。だから最う五日だね、あと。』

無邪氣なる者よ！　汝の名は五等水兵なり。

大晦日の夜はまた騒ぎである。『總員釣床卸せ』の號令に、其年の課業に別れて、それからは勝手々々、靴を磨く者、衣嚢を擔ぎ出して、明日着る良い服の塵を拂ふ者、故郷の知己へ年賀狀を書く者、釣床の其所此所に起る談笑の聲、何夜も暗い電燈も今夜はばかに明るく、硝子戸を透して、街の燈火が仄りと空を染めて居るのを見ても、大晦日の氣分は湧く。

『あゝ、今日は元日なのだつけ！』と寢忘れて居た樂しさに打つかつて、首を擡げると、軍港の空は紫懸つて、二三片の雲が橙色に光り出そうとして居る。まだ早い何時だらうと思つて居ると、丁度にカンカンと五時の鐘、まだ一時間ある、早く起きたいが總員起しのないうちに起きるのは番兵がやかましい。元日の朝から初小言でもあるまいと虫を殺して毛布を被る、彼方でも此方でもゴソ〳〵と目を覺す。『十五分前、』『五分前』と番兵が知らして歩く。釣床の中で靴下を穿いたり、着物を着て居る者さへある。

軈て勇しい『總員起し』の喇叭が元日の朝の空氣を顫はせる　懐しい故郷の夢は、堅く釣床に封込めてまた今夜其の續きを見たいものと—

朝の軍事點檢、別科も昨年と變りはない。顔を洗つて『御早う』『御目出度う』とニコ〳〵者、食事用意が待遠しい！

食事用意が鳴る、食卓番は鍋を重さうに提げて來る。サアどんな雜煮

が、と思ひきや、これはまた何とした事であらう、冷切つた大根の味噌汁に、相變らずの麥の御飯の舊態依然たり。相變らずと云ふ處に意味がありと見ても、納まらぬは腹の虫である。

『何だいこれは。エ、いくら何だつてあんまりヒドいや。』

『元日の朝位餅を食はせなくちや、なんぼ軍隊だつて。』

『馬鹿にして居る。』

氣の早いのは、最う涙を呑んで居る。

處へ外出から歸つた敎班長のにこやかな顏、一同頭は下げたが、御目出度うと挨拶してよいものか惡いものかと、一寸ドマ付いて居ると。

『イヤ皆、御目出度う……海軍では朝は御馳走は無いよ、相變らずの味噌汁に挽割飯だが、畫には御馳走がウントある。吃驚する程ある……』と敎班長は最う家で差向ひで御祝ひをして來たらしく、御機嫌麗しい。

兎に角、敎班長の言を信じ、畫を待つて前後策を講ずる事として、箸をとる。あゝ之れも軍隊だと、冷たい味噌汁と共に飲む悲痛の涙！。

日課手入も手輕くすまし、十時十五分には遙拜式を行はせられる。團長始め美々しく飾つた通常禮裝、軍樂隊の緋の上衣が初日は映える。

軍港在泊の艦船の凡ては、檣頭高く松を飾り、滿艦飾の彩旗はユラリ〳〵と瑞風に飜る。船と云ふ船は小いボートまでも樹てた、我海軍の武威の象徵たる軍艦旗は、靜かに湛えた碧の波に其の紅を溶かして太陽はユラ〳〵と、聲なき聲に御代を謠ふ。

十時十五分、遙拜式の位置に整列して軍樂隊は『國の鎭め』を奏でる

一同は遠く東都の空を仰いで敬意を表す。血を搖り動かす太鼓の響、喇叭の音！

聖壽の萬歳を祝ぐと共に、この盛大の御代に生を受けし身を喜び。『汝等を股肱と頼みてぞ』と宣へる、その軍人の末端としての光榮を思ひ、その御惠に報ひ奉るべく、捧げたるこの身は、あまりに汚れ、あまりに貧弱なるを如何にせん？。――てふ感を深くしない者はないであらう

式は數分で終つたが、計らずもこの國敎の洗禮を受けて、意味ある元旦を始めて迎へたる事を泌々と感ずるのである。

それからは、只靜に語り合つて、麗から春日に浴し午前は終へる。

晝の御馳走は大したものである。菓子一折、中には紅白の餅二枚もはいつて居る。ピフテキ、キントン、おせちの物は竹の皮包みで、銀色の

御飯、さて諸君の御機嫌は癒つたが、『これで屠蘇が一杯あつたら申分はないのだがなア。』と、誰やらが小聲で、慾には限りのないものである。

午後から半分の人は外出を許される。滿腹の腹を抱えて、街の景氣を見て來るのだと、イソ〳〵と引卒されて出て行く。殘つた者は今日の有樣を故郷へ細々と書き送る。

夕、別科には恒例とあつて君ケ代を歌ひ、直ちに釣床を卸して、六時半まで遊藝許しがある。これまた大騷ぎである。

卓を片付けて、高座を作るやら、張扇を探して來るやら。誰か、誰かと云つても始めは駄目です駄目ですと尻込して居るが一人が皮切をやれば、次へ〳〵と藝人は出て來る。浪花節、落語、琵琶、詩吟、端唄、情歌、終ひにはお祝ひの三河萬歳と來て大分大向ふをうならせた。

徴募兵丈に流石は戰場往來の强者も居る。素面でこれだから、少しでも御みきが入つたら大した事になるだらうと、皆々歡を盡して引上げる。

其夜の釣床の暖かさも忘れ得ない一つである。

二日三日と休みで、四日から事業始め、また〳〵埃の舞ひ立つ練兵場でオイチニの練習である。一日の夜、一同の頤を解いた萬歳の先生も此處では矢張り一個の水兵の未成品で、一生懸命で銃を擔いで歩方の稽古をして居る。流石は軍隊なればこそ！

日記より

一月九日、金、午前銃隊、北風激しく砂塵烟の如し、中隊の散兵教練、皆の顏色なし。中隊教練もこれにて了り、次週よりは試驗なるよし。別科手旗信號。

一月十日、土、例の通り大掃除、今度はボー洗ひ方に當り、少々樂なり午後外出、錢なくなりて心細し。

菓子一袋

定量の外は得られぬ—野性の表現—『菓子許し』—

情が仇—悲慘事—

漸次と生活にも馴れ、課業も進んで來るとなか〳〵腹がへる。横須賀から一里餘もある大津と云ふ處の練兵場まで行軍して、其上に中隊の散兵教練で、廣い芝原を飛び歩いたり臥たり起きたりしたあげく、パンの一片と乾干びた牛肉少量に我慢して歸つて來なければならぬ。また短艇漕方となつて、二間餘もある太いオールを半日も引張つたら大抵へト〳〵となる、それで歸つて來ても定量の外は一切口に入る物とては得られぬまして百姓などの出身で、大食癖を有つて居る人々は大の苦痛を感ずる食ひたい！。

それは腹のへると云ふ事も事實ではあるが其の他にまだ理由がある、それは、他に何も彼等の勞を慰めて呉れる者がないから、この安價な、さもしい、口の味覺に依つて自ら慰めやうと云ふのである。人間と云ふ奴は、激しい束縛を與へられ、其の趣味慰安と云ふものを禁ぜられたら必ず口に依つて慰まうとする。これは人間の野性の表現であらうと思ふ

海軍で新兵に酒保の飲食物を禁ずると云ふのは、多年の經驗から歸納して得た結果によつて、彼等が前述の如き理由によつて口に慰安を求むるの餘り、自制力を失つて、終に身體を害すると云ふ處から來たものであらうが、それならば他に方法を設けて、彼等の慰安救濟の道を講じてやるべきだらうと思ふ。

議論はさておいて、酒保は禁じられて居るが一週間に二回、火曜とか木曜とか、菓子許しと云ふ日がある、それは釣床卸して後、當直教班長が酒保から菓子を取寄せて各自に一個づゝ賣り渡すのである。— 一個とは一袋の事で代四錢也—彼等は其日を樂しみに待つて居るのである。

『オイ、奈何したもんだらう、かう、菓子が食ひたいとは、いゝ年をしてサ、自分の子供に嗤はれちまうな。』

『眞箇だな、市中に居たとても、かう毎晩のやうに菓子を食ひやうない食へつたつて食へもしない。』

『また食ひたいとも思はないよ。何時でも食へると思ふから。それが、食ふ事は出來ない。食つてはならないとなると無暗に食ひたくなるんだね。人間て奴は困つた奴サ。』

『こんな甘くもない菓子をな。』

暗い電燈の下釣床の中で、一袋の菓子を持つて、喜々として樂み食つて居る憐れなる者、それが二十二の男子である。妻あり、子ある者がある。

追々と日を經るにつれて彼等の本能はそれで滿足しなくなつて來る。何等かの方法を講じてもそれを得やうとする。舊兵の知己に賴んで買つて貰つたり、また見ず知らずの舊兵でも、彼等が賴めば、一度かうした經驗を嘗て來た舊兵は快く買つて呉れる。それでも滿足しない者は、決死隊をやるのである。それは、自身酒保に行つて買つて來るので、舊兵舍と新兵舍とは鐵道線路一條を隔つる許りである。本能に追はれた彼等はメス紐のマークを隱し、服裝を正して舊兵らしく粧つて行つてもそれが舊兵の眸には一目で新兵と云ふ事は判るけれども舊兵は知らぬ顏をして居る。酒保員も知つては居るが、大底は無言で賣つて呉れる。

その情が仇となつて、新兵は非道い目に會ふのだ。先づ意地の惡い——或は嚴格な——教班長があつてそれを嗅ぎ付けると、早速、暗に伏兵をする、思ふ物を得て嬉しさに警戒も忘れて歸つて來る彼等は早速に捕虜となる、その果は御定りの教員室の訊問となつて、品物は取上られる、ビンタは食ふ、遂には注意人物と目されて試驗の成績にも關係する。

『オイ兵舍の入口を見て來いよ、とても可愛想を通り越して可笑しくなるよ』

『何んだ何んた』

とドヤ〳〵行つて見ると一人の男は一本の羊羹を喞へて兩手を上にあげて立たせられて居る、口から涎を垂らして、何と悲慘事であらう。

それも度々となると多くの戰友も、

『また、立たせられてる、今度は何分隊の者だ。』なぞと平氣である。

彼等はかゝる境を經なければ、所謂、優良なる軍人とはなれぬのだ。

海軍笑話

教班長『お前晝飯を食つたか？』

新　兵『まだ食べませんがパンを少したべました』

教班長『馬鹿、それが晝飯だ！』

新　兵『へエーー。』

課業

軍人精神の基本―水兵の卵だ―櫻やボプらの芽がふくらんで―艦砲と運用術―鵜呑的に―冗慢な日本語―端艇漕法―一家水入らず―海水を嘗めて見た組―

水兵の教課は、種々あるが大別すれば、砲術と、運用術とである。砲術とは艦砲と銃隊で、運用とは、艦の種類、構造、艦に關する智識一切を教へられ、其他に、短艇橈漕法、同く帆走法、櫓艇橈漕法などがある。

銃隊では、軍人精神の基本となるべき姿勢から始つて、陸戰に關する大體を教へられる、朔風の吹捲る練兵場で、凍える手がともすれば銃をとり落さうとするのを吃驚して握り締め、つく〳〵と考へ込んで、つひ教班長の説明を聞き落して一喝を食ふ。

『何を貴樣、考へて居たか？、家の事か嬶の事か？、俺が一生懸命說明して居たのに茫然して居るからあとで訊ても判りやしない。そんな事ぢや駄目だぞ、お前は一個の海軍々人となつたんだぞ、市中では何をして來たか知らないが、軍隊に來れば、水兵の卵だ。心を入れ更えろ、幾百人中から選拔されて來た名譽ある體ぢやないか、村の人々は何と云つて御前を送つて呉れたか、まさか惡い成績を取つて來て呉れと云やあしまい。』

惡かつた、全くまだ自分は精神が込つて居ない、熱心な敎班長に對して申譯がない――

それも始めのうちで、小隊敎練、中隊敎練と進んで行き、大津の練兵場へでも行くやうになれば中々面白くなつて來る。

湘南の春！　日々の花信は新聞のない團內では知る由もないが、練兵場の櫻や、ポプラの芽かふくらんで、兵舍の裏から續いた山々も色付いて來る。課業始めの時整列した人々の白い事業服にパッと當つた日光の色、あゝ春が來る！　暖い春が來る！。

最う寒い思ひをしなくてもよい、凍えた手を襟首から打込んで温めなくてもいゝ、あゝ嬉しい、と力强く踏締めて歩るく靴の下から、パッと舞立つ埃も春らしい。

そうなつて來ると、一日々々が愉快に面白く暮せる、人々の面にも云知れぬ、力と、元氣が溢れて來る。

暖かい春の日を浴びて、喇叭に步調を合せながら銃を擔いで街の中を行く時、何とも云へない、嬉しい、勇しい、エラクなつたやうな感が起

る。

其頃になると人々は大津行を待つて居る。晝休みに練兵場の草原に寢そべつて、空を仰いだり、新しい草の芽を摘んだり、蝶を追つたりする晝食後の自由の一時間が樂しいからだ。

艦砲は海兵として最も重要な課目の一つであるが、始めは大砲の構造の大體や、其の操法を習得する許りである。殊に海兵團は備砲を舊式で砲臺にあるのだから、實際に遠つて居るから面白味が少ない。

運用は仲々複雜で多少頭腦も使はなくちやならぬ、最初は艦艇の類別で、何は戰艦で、何は巡洋艦であるとか云ふ事から、艦の構造一通り、龍骨だとか、リブだとか、ビームだとかゝら、リギン、マスト、ヤードなどは誰でも知つて居るが、アッパーマストヤード、ローアマストステ

ーなど專門的になつて來るとマゴ付く、これは凡て鵜呑的に覺え込まなければならぬ。

海軍では五年許り前から英語を凡て廢せと云ふ事になつたが、これはある程度までは行はれない、船體器具の名稱にしても、覺える時には一寸マゴつくが、覺え込んだからにはこの簡單にして通りのよい語は中々廢せない。加之永い習慣と到底日本語に譯しきれない名があるに於ては海軍の中からこの毛唐語を驅逐する事は出來ない。一例を上げれば、鋼線索はワイヤで濟むし、昇降口はハッチで解る、ましてボートフォール——端艇をダビット——（舷側に出て居る腕を曲げた如な格好のもの）——に引上る綱——は日本語では何と譯すであらう。

敏速を尊ぶ艦内生活に冗慢な日本語は使用にたへぬ——これは餘事で

あるが――。

運用には其他に、結索法と云つて綱の結び方も習はねばならず。傳馬船漕方も一通り習はねばならず、尙、愉快なボートがある。

海兵團にある端艇（カッター）は十二人で漕ぐ双座艇である。始のうちは、繫いで置いて、其の姿勢から練習し、漸々と沖に出て行く、一握りに餘る太さで二間もあるオールは、不馴な者には大の重荷である。手は凍える、筋は詰る。ハット思つて居るうちにオールを流せば教班長の眸は光る。これでも一泣き泣かなければならぬ。

それも追々に上手になつて來て、軍港から出て行くやうになると、世も春となる。軍港を繞つた山々の枯色の中に幾株の櫻が仄のりと色付て來る。沖は遠く霞むで、白い帆の影が重り合つて、油を流したやうな東京灣の春の凪、其中に浮ぶ十五六隻のボート、一漕ぎ漕いで、橈を組んで汗ばんだ顏を拭く、青竹色の潮がヒタ〳〵と舷側は鳴つて、輕い動搖が人々の寢氣を誘ふ程、

『十五分間休憩！煙草を喫んでいゝぞ！』艇長たる教班長と、艇員たる十三名の部下と一家水入らずの樂しさに、其の十五分間は面白く暮されると教班長の永い海軍生活の一端が話されると各々は好奇の耳を傾けて聽く。

『オイ、此の中に横須賀に來て始めて海を見たと云ふ者があるか。』と教班長が嘲笑的な質問を出すと、二人三人位は手を上げる。

『教班長、海の水つてほんとに鹽ばいんですね。』と一人は不思議相な顏をする。

『ウフ、御前は何國だ、山梨だつたな！、海兵團に來ると直に、あの海岸に行つてそつと覗めて見た組だな。そう云ふ連中が多いんだから俺も骨が折れるよ。』と大笑ひとなる。

傳馬船漕方、これも面白い課目である。これと端艇帆走とには其の部下に教班長が教へられると云ふ場合がよくある。それは、十三人の一班の内には荒波の太平洋で育つて來たと云ふやうな漁師や船頭が大抵二人位宛配より組込まれてあるからである。

其他には、兵器學では彈丸や火藥の事を學び、水雷の大意、手旗信號投鉛法、傳令法など別科として教へられる。

本科は、試驗があつて、採點、成績順を定めるのは學校と同じである。

愉快な演習

新兵の願—牡丹餅が旨いぞ—注意の數々—春の歡喜に滿ちた野の途を—輕い空放の銃音—舍營—巡檢後の騒ぎ—警急呼集—辻堂の名物『芳』の講評—

海兵團の五ヶ月の生活中其の目的として慰安となつて居るのは無論卒業して船に乘込むと云ふ事である。一日も早く、暗い淋い—そう感じられる—生活から蟬脱して、少くも變化に富み、花やかであり自由であると云はれる船の生活に入りたいと云ふ事は、一日も忘れぬ願であるが、茲に一つ卒業に先立つて樂しみな事がある。それは四月中旬頃に行はれる辻堂演習である。

辻堂演習と云ふのは陸戰隊の機動演習で、今まで習ひ覺へた陸戰要務

を實地に行つて見る事なのである。場所は神奈川縣下高座郡、明治村辻堂と云ふ―藤澤の先―處の海岸で廣い砂原の海軍用地がある。横須賀から六里餘りを行軍して行つて、其處で種々な演習をやるのである。

入團して暫く經つて、教班長は其の演習の面白い事を話して聞かせる鎌倉や江の島の見物出來る事や、舍營に就いての樂しさ、其の家で御馳走して呉れる牡丹餅の旨いと云ふことまでも話してくれる。

『だからあんまり金を使つに了ふな。』と、

春三月、溶けるやうな春日の下を、白い砂を踏んで片瀨腰越あたり、銃を擔ぎ淺黄の彈藥糧囊を懸け、隊伍を調へて行軍して行く、自分等の姿が浮んで來る。

『銃器に故障のある者は申出よ』『劍は道で落さぬやう細紐で結で置け』

『靴は氣取つて新しいのを穿て行くと必と肉刺を慥へるから一番穿き馴れたのを穿いて行け』『脚袢のコハゼは取れて居ないか』『日用品も忘れるな。』と、分隊長や教班長が注意の數々の言葉の裡にも、その樂さが偲ばれる。小學校で遠足に行く朝、母が細々と注意して呉れた事などが思ひ出されて懷しく前日は各々準備に忙しい。

其日の朝となれば、總員起しの喇叭が待遠い程早く目が覺める。氣づかつた空も名殘なく晴れて、最うギラ〳〵と朝日が硝子戸に當つて居る毛布三枚に襦袢事業服一着、日用品などは荷造りして先に汽車で送る。

其朝は、別科もなければ、食事もイツ〳〵と辨當二食分と空放とを糧囊に入れて背負ふとなか〳〵重い。

七時頃には整列―隊の編成は前日あたりに遣つて置く―乘艇出發と

なる。

端艇は水雷學校のある長浦に着けられる。それから逗子を經て鎌倉までは大抵通常行軍である。

通常行軍となれば『道足』『談話煙草許す』があるから、人々は勝手に語り勝手に眺め、普通の旅行のやうな心地で歩いて行かれる。

櫻は最う散つて居ても、春日に照らされた若葉の鮮かな色は若人の心をそゝらずには置かぬ。無味な團内の生活から離れて、春の歡喜に滿ちた野の途を進んで行く人々の胸の中は！　青い空を仰いで身をすくめて幸福を喜び、或は黑い土の香を嗅ぎ、穗を孕んだ麥の青さ、菜種の黃、セピヤ色に糸遊の燃える農家の軒などを見ては、故郷の樣なども懷しく思ひ出される。

晝食には鎌倉の旅館三橋の庭園が借りられる。芝生には一列に蓆が敷かれ、沸された茶が給される。辨當の竹皮包も半日背負れて來て乾干びては居るが其の旨さ！。

午後からは愈々警戒行軍で二個分隊許りの假設敵は三十分前に出發する、一時頃には整列想定を與へられて出發する。

切通しを扳けて稻村ケ崎、腰越、片瀨あたりの砂原で第一回の衝突がある。

春を載せた大洋の波はゆるく渚に打よせる。赭色に續く砂原の斜面には淺黃の糧囊を懸けた黑服白脚袢の散兵が畫のやうに散伏して居る。ポンポン、ポンポン、と輕い空放の銃音も、この四邊りの平靜を破るには充分である。松の青い壁の白い西洋人の別莊の窓からや、療養院の露臺

に日光浴をして居る患者の群、白い服の看護婦、赤いボンネットの毛唐の子、都くさいバラソルの女など、單調無寥に苦んで居る夫等の人達はこれはまた時にとつての見物であると許りにそれを見送る。

江の島を左に見て鵠沼から辻堂まで、砂原を駈けたり小松の根方に蹲つたり、腹をへらし足を棒にして舍營に就くのは日暮である。砂まみれになつた銃の手入を第一に、靴を磨き服の埃を拔ひ、丸い据風呂に一日の汗を流して、さて夕食の旨さ、宿の馳走の牡丹餅の成程旨い事、味其物は大した美味ではないのだが空腹が凡てを美化するのだ。生家ならば最一つと御代りを出すのだが、そこは兵隊の悲さで、『軍隊』は何處までも就いて廻る。

舍營は普通の農家であるが、凡てが調つて居る。アームラックでき銃架も出來て居れば枕なども分隊の頭數丈揃つて居る。家人も兵隊の氣心を呑込んで居るので仕末がいゝ、海軍が此地に來始めたのは明治十八九年の頃からだと云ふ。其の爲めに此辻堂も開發した事は少くない。

夕食後から八時の巡檢まで散歩を許されるが田舍の事故散歩する處もない。巡檢には當直將校が廻つて來る。

巡檢後にはまた騷ぎがはじまる。一日の飛び歩きに疲れては居るが其處は若いものたち、久し振りで疊の上に寢ていゝ夢を見やうなどおとなしい考へを起しても他が左樣はさせて置かぬ。宿から夜食に茶を入れて出される。サア起ろと許り方端から毛布をめくつてしまう。茶話に花が咲いて、鱸て左黨は何時か團結してさて緊急動議は持出される。幸ひ分隊下士たる教班長も其組であれば、内々だよ、と、云ふ條件が付いて安

協は成立する、反對派の甘黨はまたそれで阿彌陀だなぞと、相變らずアンパン餅菓子などに大に快をやる。興がのれば唄も出る。頭梁株は遠く離れて、少く手綱を絶めば、直ぐに急の付のは仕方のない事で、圏内でない事故に少しは目をそらして呉れる。けれども兵隊側に於ても『軍隊』と云ふ事を忘れる事は出來ない。それはあたりまへの事で、何も遊山に來て居るのではない、重大な演習に來て居るのであると云ふ事は知つて居る。加之滞在三夜の中一夜は必ず警急呼集と云ふのがあるので其際に所すべきの覺悟はある。それは敵襲に應ずる一つの演習で、豫め集合所が定めてあつて、喇叭が鳴つたならば直ぐに飛起きて武裝を調へ集合所に集つて其の遲速を爭ふ演習である。

であるから當人の兵隊は勿論の事、宿の人達もそれに耳を傾けて居る長い間の經驗から、兵隊よりも早く其喇叭を聞つける事もある。自分の宿に泊つた人達が遲かつたと云はれては良い心地がしないと云ふのは人情で、大騒ぎをやつて早く出して、遣ると云ふ風がある。

二三日は戰鬪射擊やら何やらで辻堂の海岸に出かける。江の島が繪の樣に霞むのを遙に眺めて、暖い春の光りの下に砂原を駈け廻つて一日は愉快に暮される。

茲で一つの名物を紹介しなくてはならない、それは辻堂村に棲む芳公と云ふ一人の白痴である、白痴を名物とは不憫だが中々の愛嬌者で横須賀の海軍部内でその芳の名を誰知らぬものはない。彼は今年二十六才位の青年であらうが、身長は四尺七八寸、佝僂で目くちやで、何日も子供と一緒に遊んで居て兵隊が來るとその傍を離れないで隨いて歩く。低能

兒であるが、模倣の奇才を有し、指揮官や中隊長の講評の眞似がその呼物となつて居るのだ。然も其の言ふ事が一つも條理を脱して居ない、悉く陸戰の要務に適ひ、兵語なども少しも間違つて居ない。少尉の新しいのなどに舌を卷かせる。

休憩時、砂に寢轉んで『オイ芳の講評を聞かう。』なぞと軈て彼は人々の面前に立たせられる。

『今日は一體に彈着が不明である。手前達あ一體何處を狙つて擊つのか

かう云ふ日光の當つて居る日は、照星が光つて見出しやすいから彈着が高くなる……と云ふ事は言つてある……。』などゝ來る。

『あれ程紐で結んで置けと云つたに、手前達あ云ふ事を聞かないから、今日も劍を落した者がある……いけない。また劍杖を落した者もある、そんな奴は船に歸つて立番させるウ。』などゝ來ると。中々皮肉で、或は白痴の眞似として兵隊を罵倒して居るのぢやないかと思はれる。兎に角彼は不思議な人物である。

四日目の朝は早辻堂とも別れなければならぬ。種々と世話になつた舍營にも二十錢三十錢と醵金して、志に酬ゐると云ふ事も忘れない。江の島の棧橋あたりまでまた對抗演習、了つて講評、一時間許り江の島を見學して、それから海岸をトボ〳〵と通常行軍、こゝで駈足を遣らせられるのも中々疲れた身には苦しい、その疲れを軍歌にまぎらはして、鎌倉に着いて例の三橋で晝食、夕方横須賀に歸ると、最う縱の物を横にするのも嫌やな位。

『あゝ矢張り釣床がいゝな。』と勝手な事を云て、皆獸の如に眠入て了う』

卒業

携帶履歴—後悔先に立たず—君は何艦へ—卒業式—酒保へ行つてもいゝか?—海兵團もお別れ—もう休暇の話—最後のお小言—散れ武士死—

楽しかつた辻堂演習も濟んで了つた。各科の試驗もポツ〳〵と方が付く。

教班長が口癖のやうに、

『良い成績をとれ、お前達の損だぞ、海兵團の成績はちやんと携帶履歴——陸軍の軍隊手牒に相當するもので、原籍、入籍番號、學歴其他種々の事が記入してある——に載つて先々まで關係して行くのだから。』と云ふ親切な言葉に對して、

『なアに成績なんざどうでもいゝ、早く艦へ乘れさへすれば……。』と腹の中では思つて居ても、さて試驗となれば矢張り腦味噌を絞つて、過去の不心得を悔ひる。

『あ、あんな處で點をとられて了つた』と、コボしても後悔先に立たずで、まづ眞價は定つてしまう。

それでも、良かれ惡かれ濟んで了へば重荷を卸したやうな氣になつて早く成績が發表になればいゝと待つて居る。

四月卅日の卒業式も迫つて來る。其間に成績も發表になれば、配乘艦名も定まる。

『君は何艦、鞍馬?。』

『俺は榛名だよ。』

『俺も榛名だよ、何處までも一緒だね。宜敷く願ます！。』

『あゝ、俺は艦隊だア、嫌だな夏休暇はないと云ふし、豫備艦に乗りたかつたなア。』

『なんだい上等ぢやないか最新式巡洋戦艦のパリ〳〵ぢアないか、俺なんか橋立のヨボ〳〵よ。』

『あゝよかつた、俺は筑波に行きたいと思つたら丁度よかつた。俺の村から來た人が乗つて居るから。』

煙草盆の傍と云はず、卓の傍、釣床の中と云はず當分はこのはなしで持切りである。

卒業式には軍服に着更えて、兵舎の前で施行せられる。

『四等水兵を命ず――、一年四月三十日』と云ふ團長の嚴かな言葉に一同は固くなる。それから、最首席者が答辭を讀み、尙團長の御喜びやら乗艦後の心得やら、一同は有難く感銘して式は了る。

四等水兵になつた。新兵を卒業した。早く艦に乗つて、上陸しても最う自由に歩けるのだ喜しいな――。

『教班長！　酒保へ行つてもいゝでせうね。もう新兵ぢやないんですから。』これはまたハツた男、もう酒保の事を云つて居る。と云つても、それは一同の願ひで、酒保がそれ程新兵の腦裡に權力を逞ふして居るのは全く事實なのだから仕方がない。教班長も苦笑せずには居られない。

『ハハ、いゝだらう、併し二個以上は買つてはならぬ。教育主任が許されても俺が許さぬ。俺はお前達が艦に乗るまで、お前達をあずかつて居るのだから。』教班長の御尤もな言葉にも、

『へへ、』と變な微笑を投懸けて一散に走つて行く、酒保を目がけて。

配乘は二三日の中に行はれる。出港して居ない艦には、歸港を待つか或は他の艦に便乘で廻航先に廻される事もある。

釣床は解いて返し、毛布は蒲團覆にくるんで衣嚢と一緒に括る。帽子罐、日用品など手落なく。

あゝ、最う海兵團もお別れだと思ふと、何んだか淋しい。或時は心に呪つても見、恨んでも見たこの新兵舍、其の光景が――卓、柱、桁、毎日釣床を吊つたあの鈎、何時も伍長の怒鳴り出すあの教員室の薄暗闇さては煙草盆の邊など、かう整然腦裡に出來上つて居れば、これも懷しい。あゝ四等水兵となつて艦へ乘つて行くのはいゝが、その艦はさてどんな處だらう、俺達が無論下級の卒だ、始めて舊兵の中には入つて行くのも不安である。『艦ではとても今までのやうに手を把つて教へてはくれないぞ、お前達は最う一人前として先では取扱ふのだから。』と云ふ教班長の言葉も思ひ出される。

『艦へ行つても手紙を寄越して呉れな。』

『あゝ、上陸して會えるかも知れないよ。』

『休暇も一緒に取らう。』

『最う休暇の話か、早いなハハ。』

『サアお別れだ、最う滿期の時でなきや海兵團の御厄介にやならないぞ。』なぞと毒吐くのもあれば。

『俺はどうも海上生活は向かないから次の補充交代にはまた海兵團に卸されやう。』なぞと弱音を吐く者もある。

艦て各艦から其艦の頭字を舷側に書いたボートが迎へに来る。

『教班長、永々御厄介になりました。』

『ア、、永々御苦勞であつた。まア艦へ行つても一生懸命働いて良成績をとつてくれ。』教班長の語には矢張り情が籠つて居る。

『オイ、そう座り込んで、御客樣ぢやないんだから、自分で漕いで行くんだよ。』など、最終の御小言を頂戴して居る向もある。

衣嚢も積んで、扨漕出すこれが海に乘出す第一歩である。舊兵達に嗤はれまいと櫓持つ手も一生懸命。あゝその純な心、その尊い心を何時までも持續させたいのだが、吸取紙のやうな彼等の心は艦て種々な色を吸取つてしまうのだ。

艇は漸々離れる、海岸の石垣の上には教班長達と、殘つた戰友達が帽子を振つて送つて呉れる。

『さらば！』

幸あれ、この門出。

我艦は遙に、ゆるく烟を吐いて居る。

御勅諭の軍人精神五ヶ條

軍人は

チ 忠節を盡すを本分とすべし

レ 禮儀を正しくすべし

ブ 武勇を尚ぶべし

シ 信義を重んずべし

シ 質素を旨とすべし

散れ武士死

日記より

四月廿五日　晴。あたゝかし。故郷の妹より來信、上野の櫻花盛りなるよし、鎭守府の櫻も見頃なる由なれども、こつちは花見どころにあらず。皆々配乘艦名のきまるを待つこと久し、本日座學復習。

四月廿七日　小生の配乘は香取ときまる。香取は第一艦隊にて來月早々神戸に向け出帆の豫定なる由、愉快々々、我教班十三人中、香取四人、河内四人、筑波二人、相模一人、八雲一人、宗谷一人、宗谷に行くKは遠洋航海に行けるとて大喜び、うらやまし。

軍艦生活

乘艦

眞箇の新兵生活—配置表—配員番號—右舷直左舷直—戰闘配置—食卓—新兵の教育—『艦の兵員として』—分隊長—分隊附將校と先任下士—艦内旅行—『階段は駈歩』—これからは腕次第—『分隊から整列』—進級試驗實務點數—始めて錨のマーク—さん附けにしてくれる人が來た—殿は附けない海軍の呼び方

海兵團を卒業して、あゝ先づ安心だと重荷を卸したやうな氣になつたらそれこそ大なる誤りで、四等卒で艦へ乘せられてまた六ヶ月、舊兵の間に立まぢつて始めて眞箇の新兵生活をやらなければならぬ。今まではお互に新兵同志、不平にも樂しさにも合槌を打合つて暮して來たのだが艦へ來て舊兵の前で不平でも言はうもんならそれこそ。

『こんどの四等水兵は圖々敷、もうコボして居ややがる。』とすぐ目を付けられる。

加之、仕事が複雜で多忙であるからなか〳〵以て樂だ、苦しいなど考へる閑もない位。

先づ艦へ乘つて行くと、七八名―或は十二三名―無論艦の大い小いに依つて數の大小はある―宛各分隊に割宛られる―其處で第一番に知らされるのが各自の配置である。乘艦直ちにその分隊の新兵係りから右樣なものを一枚づゝ渡される。尤もこの配置表なるものは艦々に依つて形式は違ふが大體の處は同じである。

で茲に少しく説明を要するが、第一の兵籍番號は、兵役に入つた番號で、横徽と云ふのは横須賀の徽募兵と云ふ意味で志願兵なれば横志となり、呉なれば呉徽或は呉志となるのである。次の配員番號なるものは戰鬪配置を形作つて居る各個の符號であつて其配置に入れば、それが其の人の代名詞である。一〇九二と呼ばれゝばハイと返事をしなければならない、其番號の數字にも〳〵意味があるので、上の一の字は分隊、即ち第一分隊を表し、最下の二は、部――この部に就ては航海直などに必要があるので後に説明す―を、意味し其數字が奇數なれば右舷直、偶數なれば左舷直である。この番號は各

配置表

入籍番號	横徽壹參八六貳
配員番號	二番三吋砲員
戰鬪部署	一〇九二
銃器	一三五
食卓	第八卓
等級氏名	四水三 浦濤平

自の釣床を始め、衣嚢、手箱等にも付いて居て、其の番號を見れば、あゝ之は俺のだと云ふ事が一見して解る。次の戰鬪配置は即ち戰爭する場所で、各自の死場所であるから最も大切な處である。次の食卓は飯を食ふ卓だが、手紙も書けば被服の縫繕もすれば本も讀む。其の員數は定つて居ないが、大抵一個の戰鬪配置が二個宛位、集つて出來て居る。例へば八卓は二番三吋砲員四名四番三吋砲員四名と彈藥供給員二名合計十名と云つた具合で、其の中の最先任者が或は他の下士官が來て卓長となつて一同を統べる、丁度一家族の形で、種々と助け合ふ、上陸して雨が降つて來れば雨衣も屆けて呉れる。釣床も釣つて置いてくれる、病室へ入室すれば食事を運んで呉れるのも同じ卓の者、其の中で退艦する者があれば一同で僅かながら餞けの品を贈ると云ふ具合である。

次の銃器番號は説明を要すまい。等級の四水は四等水兵の略である。で如上の配置表を渡されて、第一にそれを覺え、それから各分隊から新兵係一名に助手一名、其上に何れかの分隊長一名が新兵教育係となつてまた新兵の教育が始まる。今まで海兵團で教へられて來た事は、海軍一般に何處へ行つても通用する、即ち基本の教育であつたのだが、今度はそれに付加へて實地に働き得る樣、また其配乘させられた艦の氣風に合つた一個の『艦の兵員として』揑變へられなければならぬ。一軒々々の家に各々違つた家風がある如に、同じ日本の軍艦の中にも製造當時から自づと違つた習慣が出來て居る。隨つて内規や部署も、艦の大小、武器の大小新舊によつて違ふ。新乘艦の新兵は我艦其者を一日も早く呑込んで、遺憾なく働き得るやうにならなければならぬ。當事者の苦心は玆

にあつて、種々な方法手段を以て自分の艦の兵員として仕上げる事に努めて居る。

で、新兵各自の胸に下げたメス紐に分隊色分の布を付けられる。黄は一分隊、青は三分隊と云ふやうに一見してこれは何分隊の四等水兵であ云ふことが判るためである。それでさへ大な艦になると、知らぬ顔して他分隊にまぎれ込んで新兵係兵曹をまごつかせる事がある。次ぎには、艦長副長、我が分隊長其他首脳部の官職氏名を覺えさせられる。

――分隊長（少佐、大尉）は下士卒に對して、丁度陸軍の中隊長に相當する職務を有して居る。其分隊内の者は、公私事一切凡て分隊長の手を煩はせねばならぬ。其下に分隊付將校（中少尉）が之を補佐し、分隊先任下士は上下を調停連絡を取つて居る。一つの艦を一郡と見立てたならば艦長が郡長様で副長が助役、各分隊が其管下の村で分隊長が村長様、其下の各食卓が一軒の家とすれば卓長が、一家の家長と云ふ格になる。

其の次に教へられるのが其艦の大サ、噸數、製造所及び年月、戰鬪力などで、次に五六日は艦内旅行をする、新兵係が先立で一群を引連れて説明して歩く、上甲板、中甲板下甲板、掌帆科の倉庫は何區と何區にある、掌砲科要具庫は何處何處にある、大砲手入の油は此處へ貰ひに來るのだの、其他水雷室、彈藥庫から、士官各公私室、分隊長が私室へ來いと云はれたら、此處へ來るのだのと、其他分隊の受持要具の所在から消火器吐水口の番號まで一々手帳につけて置いても中々鵜のみに仕切れない。全く腦の中に出來てしまうのには一年も二年もかゝる。艦内旅行のも一つの目的は、艦内の狹い中で多人數が生活して居る事に馴れしむ

る爲めである。全く他から始めて艦に入つたら、暗い下甲板などは危險で歩けない、區劃が高く出來て居たり種々な金物が出て居たり、階段が急で狹かつたりして、始めは探足でなくては歩けないが終ひには非常な勢で飛んで歩けるやうになる。

『階段は駈歩』と口癖のやうに云つて其の迅速に努めるのは全く一秒の急を要する事件突發に所する爲めの用意からである。艦では諸整列諸操練には入渠中で無い限り一歩の處も駈歩をするのが規則である。其癖が付いて居て市中へ出ても、フラ〳〵な家の梯子段を艦の階段の心組で駈歩で昇つて家鳴震動始めて氣が付くと云ふやうな滑稽もある。

他艦内の樣子も大體了解すれば、それからさし當り必要な操練から其の他一般操練の大體を敎へられて其間二ヶ月位、茲で手綱を放されて、他の舊兵と一緒に使はれるが、まだ〳〵安心は出來ない。海兵團生活が第一期とすれば、乘艦から今までが第二期、之からが第三期と云ふ譯で、これからが各自の腕次第、働き次第で、其十一月一日の進級日には首席第一の桂冠を得られぬとも限らぬ。尤もこの進級と云ふものは停年が來てもお上の御都合次第でどうでもなるので、運のいゝ級は一人の落伍者なく、運の惡い級になると一艦で一人か二人の事もあるのであてにはならぬ。何も進級を貴ひに來た譯ではないから自分の職務さへ盡して居れば何も君に對して不忠の臣とはならぬのであるが、そこはそれ、生きた人間どもの集團で中々に生存競爭も激しい、敏捷な奴になると、他人分の仕事を奪ひ他人分までの忠を盡して御目に止らうとする。また中には働き振りだけでその名聲を贏ち得やうなど謀る卑怯な徒もある。

以上の競爭を具體的に表すのは『分隊から整列』と云ふ事である。それは、休憩時間と云はず、事業中と云はず、臨時必要に應じて所用だけの人をとる爲めに當直將校が懸ける號令である。例へば茲に今酒保の物品が舷門に來てゐる。それを酒保の倉庫まで運ばなければならぬ。公平に各分隊から二名づゝの人を取つて之れを運ばせやうとする時、當直將校は傳令に命じて『分隊から二名づゝ整列』の號令を掛けさせる。それを聞いた分隊の者は誰でも聞きつけて眞先に飛んで來て、整列する事になつて居るのだが、それが休憩時間でもあれば、舊兵が行くのに新兵が知らぬ顏をして居られぬ。自ずとこの檀場は新兵の領分となつて居る。だから當直將校の方で之は新兵では出來ない仕事だと思へば、『等級水兵分隊から二名づゝ整列。』と掛けさせる。――等級水兵とは水兵の最高級一二等水兵を指す――そうすれば古い一二等水兵が出懸けて行くと云ふ具合である。

新兵たる者休憩時間たりともうつかり腰を卸しては居られぬ、分隊からと云ふ言葉が耳元にフラ〳〵して居る。手紙を書いて居ても服を縫繕ひして居ても、それを投げ出して行かねばならぬ。心ある者は休憩時間も號令の出る根元たる後甲板の近くに行つて休みながら待つて居る。また分隊の者の居る處は意勢よく駈出すが中途から逆轉して他へそれて息を殺して居ると云ふ横着者もあるが、こんなのは前途見込のない不忠者である。

で萬一、或分隊からの整列が遲れると、傳令が其の分隊名を怒鳴つて來るので、分隊の當直の下士あたりもうつかりしては居られない。それ

が度重なれば『何分隊は何時も遅い』となつて、分隊の名盛にも關るから、下士一名位が出懸けて行つて見届けるやうにして居る。當直將校の方でも何分隊の誰は何時でも一番早く出て來ると云ふ處から、顏も覺へられ、從つて進級會議には勢力が付いて、進級日には第一番に呼び出される光榮を有する事となるので、何處も同じ優勝劣敗、生の爭鬪は中〳〵に激しい。

進み進んで、九月十月の交には、進級試驗が行はれる。それは矢張り砲術、運用と、雜問とで、前二者は平易ものだが後者は其の人の常識注意力を試すので時に中々ヒチクられる。それから進級會議があつて順序が定まる、茲で前述の『分隊から整列。』などに繁々出て献身的に働く者は、たとへ普通學が不足であるにしろ、働くからと云ふので、高い點を與へられる。此點は實務點數と云つて最も進級に勢力のある點である。

で前述の如く海軍の進級なるものは年によつて違ふが、先づ四等卒あたりで御茶を挽く事は稀なので、其歳の十一月一日には目出度く三等水兵を命ぜられたとする。茲にはじめて左腕に等級章――錨一挺――が着くのである。それと前後して新四等水兵が乘艦して來る。そうなればしめたものだ。

『やあ來た〳〵。』などと喜んで居る。中には舊兵振る譯ではないが、自分の經驗がまだ新しいので何くれとなく親切に世話して遣る。と上の舊兵が冷評して、

『さアに前達の下が來たぞ、何々さんと云つて呉れる人が來たぞ。』と成程、今までは最下級の卒で、呼び捨てにされるばかりで、さんづけ

にして呉れる者もなかつたのだが……なんだかキマりの惡いやうな氣がする。

茲で一寸海軍の言葉使ひを説明するが、海軍では上官を呼ぶにも陸軍の樣に一々殿を付けない、上下を通じて姓の下に官名を付して呼ぶ或は單に職名を呼ぶかの二つにある。茲に四等水兵があつて上官を呼ぶ場合、艦長なら艦長、分隊長なら分隊長と云ひ、大抵我艦の士官ならば其職名を、他艦の士官ならば何々大尉と云つた樣に官名を呼ぶ。何々少尉、掌砲長、先任下士、何々兵曹と云つた具合である。同じ卒となると上級なれば何々さんとさん付にし、同級なれば、何々と姓を云ふ丈は陸軍も同じ事、上官が下を呼ぶのでも、兵曹なれば何々兵曹、卒なれば只其の姓を呼ぶ丈である。

究竟これは、敏活簡明の艦の生活の生んだ賜であらうが、中々良い事である。他で聞いて居ても、少しも侮蔑の色を含んで居ない計りか、兩者間に侵すべからざる親みのあるのを感じて氣持ちがよい。

扨、茲一ケ年、種々と苦しい思ひをさして新兵を引張り廻して來たが最う目出度　三等水兵になつたし、後の級も乘つて來て、もう兄貴株になつたから、何時までも新兵扱ひにするのも氣の毒故、次から、舊兵と一くるめにして、軍艦生活の御話しをしやう。

一艦一家族

一艦を家とし―『我艦』―海兵の特色―一家族の成立―艦長と副長―航海長と信號科掌帆科船匠科―砲術長と掌砲科―水雷長と水雷科―軍醫長主計長―機關部―士官室士官―士官次官士官―甲板士官と長附―特務士官―下士卒の住所―トモの方とポールの方―一艦の組織一例―

『爲めに』と云ふ言葉の中には、まだ〳〵眞劍でない、不純な分子が含まれて居る。衷心から行はるべき行爲には『爲めに』など云ふ語は不必要である。『自己』と云ふ者を知り、責任ある自覺に到達した新い人達は完全に其自己を育汐そだてゝ、他の巳と己とに打勝たねばならぬ。其己の集りを以てなり立つて居る『國』を愛する心も茲に根差して居らねば浮薄なものとなつてしまうであらう。まして三千年の譽ある歴史を有する帝國の民、大和櫻の散際を誇る武士の血を受けし身に於て、四圍環海の邦土を守るべく、一艦を家とし、砦とし、將たまた天國として、朝に北海の流氷を碎き夕に南洋の熱波を衝くてふ痛快なる生活を送るところの海の强者達！　彼等は最う何事も唯本能的に、自分の職務を遂行すると云ふ事を意識して居る計りである。

只一挺の小銃のみが生命でない、その何萬何千噸の尨大たる軍艦の生命が彼等の生命である。萬一其艦の命の終るの時は即ち我等の命の終るの時である。など云ふ事は念頭にない。そんな事はとつくの昔に起越して居て平氣で居るのである。

彼等は自分の艦を稱ぶに、『本艦』或は『我艦』と呼んで居る。我艦の艦

長は、我艦の大砲は、など云ふ調子で他艦の友と話して居る。我艦！この不用意な、虚飾のない稱呼の中に、至情至誠のゆかしさ美しさを見ると同時に、萬斤の重をなす覺悟の一閃の熱火を見出さずには居られないではないか！。

故に、其一艦一家族の和合、友情美などはとても他の思ひ至る處でない。親よりも兄弟よりも彼等は親しく語り合つて居る。平時であつても底の知れぬ海の上の仕事、何日何處で災過に遭はぬとも限らぬ。『死なば諸共』と云ふ覺悟は互の胸襟を開いて、一同を暖い空氣の中に包んで了ふのだ。二十日三十日と、明けても波、暮れても波の大洋中に、彼等港に居る時と同じやうに愉快に且つ語り且つ笑つて仕事に從事して居る夫程親しくして居ても一度其艦を退艦すると、其艦其人達の事は水の如く忘れてしまう。けれどもこの心理狀態は『他人の別れは捧の別れ』と云ふ古諺を以て罵し去る事は出來ない。茲が海兵の一つの特色であつて退艦したらば最後、一日も早く其の艦の事を忘れて了はねばならぬ。何故ならば、轉乘して行つた先は第二の家であつて、其家の人々とまた愉快に面白く働く事が出來るやうに、一日も早く棲み馴れなければならぬからである。

其の一家族の成立、先には一艦を一郡にたとへて云つたが、これは一家族の方が妥當かも知れぬ。家長たる艦長、其下に副長、之はまた大任で丁度、主婦の役である。剛柔兼備えて居て一艦の人を良くも惡くも使ふのは副長である。朝總員の起きる十五分前に起きて、夜の八時にその廣い艦内を隅なく巡檢し了るまで、身は安まる閑もない。其他内事外事

一切副長の手を經ぬものはない。一ヶ月の内艦長は三日在艦すればよし副長は三日しか上陸する事が出來ない。と云ふ事でも副長の大任たるを推し得るであらう、だから乘員一同は名艦長、名副長を得ん事を望んで居る。其の艦の成績の上るも下るも全く副長次第と云つてよい、徒らに規則にのみ拘泥して、命令さへ懸ければ下士卒は働くものと思つて居るやうでは駄目である。下士卒の心を同化させる迄に、下士卒の心に同化してかゝらねばならぬ。下士卒の心などゝ云ふものは全く單純である、又單純でなければ海軍の仕事は仕終せない。故に、それをうまく使ふのは副長の手心一つである。艦長の人格も關係する事は論を俟たぬ。某艦長は『休憩時間は下士卒の休憩時間である、其間は可成バイフを吹くな』と其艦の下士卒はその人格に感化され、艦長が榮轉して退艦される時に泣いて別れを惜しんだと云ふ。バイフを吹くなとは號令を懸けるなと云ふ意味で、バイフとは一種の呼子笛で傳令が號令を傳へる時前振れに吹いて人々の注意を促すものである。

さて次々には航海長(中少佐)文子の通り艦の運用を掌る役で、下に信號科があり掌帆科がある、信號は説明を要さぬ、掌帆科は中々に版圍が廣い、帆布類、綱具類、其他運用に關する一切の事を掌る。掌帆長——兵曹長或は上等兵曹——其下に掌帆長屬——下士——なる者があつて品物の管理保管の任に當る、以外に傳令、操舵を務める

船匠科は艦の大工さんで船體各部此科の受持ちで、他に士官各室の裝飾品やら卓椅子、食器類に至るまで管理して居るし、尙塗具類、燈具類、消火器、潛水器まで受持ちで、潛水までやらねばならぬ。

次は砲術長(中少佐)――これは砲火指揮、砲器彈火藥に關係あるもの下に掌砲長――兵曹長或上等兵曹――尙下に掌砲長屬――下士――がある。

水雷長――は水雷の長で、水雷科――掌水雷長があり。長屬のあるのは同じとこ、探照燈はこの科の受持ち、次は分隊長(少佐大尉)――を一番二番と艦の大小に依つてその數も違ひ各其の部下の隊員を誘掖督勵して職務を施行せしめる。軍醫長(中少監)――は看護を指揮して艦内の醫務衛生に努め、

主計長の下には筆記があつて庶務に當り、尙厨宰、主厨があつて飯を炊いたり、捧給を渡したり、被服交換等給與一切を掌つて居る。

機關部には機關長があつて其下には、機械部、罐部、補機部など分れて居る、機關部は運用部――水兵部――と對立して艦の主腦部である。

極簡單に說いた各部の長(中少佐)としたのはかなり大な艦として假に書いて置いたので艦の大小に依つて定つて居ない。極小い艦になれば二三を兼備して居る。

以上述べて來た副長以下大尉相當官までは士官室士官と云つて、士官室たる公室の他に一個宛の私室を持つて居る。

次は士官次室の人々。

艦長付―中少尉―上甲板掛　將校
副長付―中少尉―下甲板掛　將校　となつて居るが兩者とも副長を補佐し艦内の保存手入整頓に腐心し、朝も十五分前に起きて兵員と一緒に洗足になつて甲板洗ひ方の監督をし、夜も副長と伴に巡檢に廻る丁度副長

の分身見たいなものである。

航海長付—中少尉—は航海長の補佐

砲術長付—同—砲術長補佐

水雷長付—同—水雷長補佐

分隊長付—同右—分隊長補佐

機關分隊長付—機中少尉—右同

中少軍醫—軍醫長補佐

中少主計—主計長補佐

右の樣な人達が居る。之は一つの公室にゴタ〳〵居て其處で飯も食へば事務もとる、私室はなくて、夜は兵員と同じやうに釣床に寢る。候補生が居て其の室がなければ矢張り此室に居る。

特務士官室。

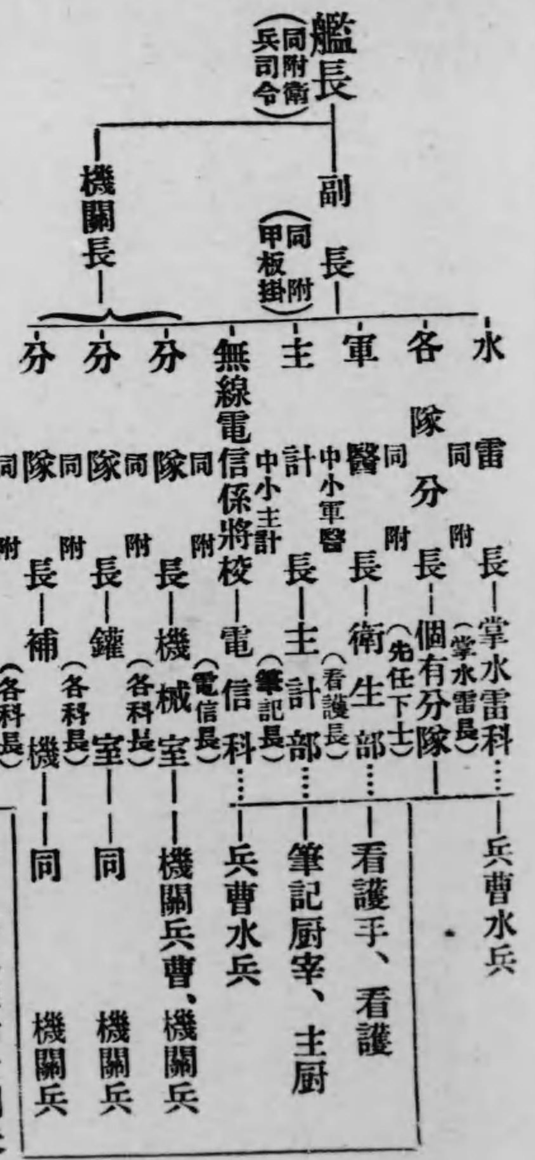
こは特務士官たる兵曹長准士官たる上等兵曹其他機關部、看護師、筆記長、船匠師など云ふ相當官の公官で、各一人或二人宛他私室を有して居る。之等の人達は皆下士卒から進級た者で、二十年二十五年と海軍の飯を食つた人達であるから、經驗と云ふ方から云つたら新しい大中尉あたりは一歩も讓らねばならぬ、故にそれ丈の待遇ば與へられてある事と思ふ。

次は下士卒であるが是は前に述べた通り食卓組織で、艦内中が住所と云つた形で、夜になれば隙間もなく釣床が釣られてしまう。それでも大體は分隊で團つて居る。

水兵達の會話を聞いて居ると、ホールの方がどうのトモの方がどうの

と云ふ言葉をよく聞く、これは何を意味するかと云ふに、艦は凡て後部が上位で前部が下位となつて居る即ちホールの方と云ふのは自分等下士卒を代表して云ふ言葉で、トモの方と云ふのは士官一般をさして云ふ代名詞である。それは士官は平生艦の後部に住し、下士卒は前部が根據となつて居るからである。そこで特務士官は何方かと云へば、矢張り下士卒出身で、中位にはあるが、矢張りホールの方の部に入つて居る。

一艦の組織（一例）



艦内の諸役員

當直將校と副直將校―衛兵司令と衛兵隊―衛兵伍長
―番兵の守所―時の鐘―當直割―先任衛兵伍長―取
次―從卒―中下甲板掃除番―内舷掛―外舷掛―守燈
番―塗具掛―砲塔當番―水雷艇小蒸汽艇員―厠番―
艦底掛―

一家族の成立は概了解したとと思ふ。次に來るべき問は其人達の毎日の仕事であるが、其間に答へる前に艦内諸役員の職務を知つて貰はねばならぬ。艦では其内規に依つて種々の役員が定められてある。一家で云ふ玄關番、庭掃、小間使と云つたやうに。

當直將校は士官が四時間宛輪番に服務して艦の内外全般の保全を掌り其他の事件物件の凡を處理する役、副直將校は補佐、衛兵司令（中少尉位）は衛兵隊を指揮し、艦内一般の警察傳令、拜觀人の監視案内等を掌らしめる。艦内の舷門や艦首に銃を持つて立つて居るのがその番兵の當直に當つて居る時で、艦の拜觀に行くと劍だけ着けた兵隊が出て來て種々と案内し説明してくれる。これが非番で休んで居るのを煩すのである。

艦の大小に依つて員數も違ふ。三等水兵以上がこれに服し、衛兵伍長（二三等兵曹）が一同を統べて居る。衛兵司令は毎朝其の服裝姿勢等の點檢をする。また司令官の座乘して居る艦が出航して行く時とか云ふやうに、海軍禮式に定められてある、衛兵禮式によつて敬意を表する場合には、この司令が掌角兵と供に衛兵隊の現に當直して居ない者を引連れ其艦に面して衛兵隊は捧銃、掌角兵はその被禮者に應じて定められた曲

譜を吹奏するのである。

番兵の勤務の守所は之も艦によつて違ふが、時鐘、左右舷門、艦首、其他中下甲板の定められた守所を守る。衛兵伍長は艦の通用門とも云ふべき左舷々門附近にあつて出入者を監視して居る。

時鐘番兵は時の鐘を打つ番兵で、また定められてある時を當直將校に報告する。海軍で打つ時の鐘は三十分毎で、普通の商船と同じだが、參考のため左に述べる。

午前		午後	
〇時半	一	〇時半	一
一時	二	一時	二
同半	三	同半	三
二時	四	二時	四
同半	五	同半	五
三時	六	三時	六
同半	七	同半	七
四時	八	四時	八
同半	一	同半	一
五時	二	五時	二
同半	三	同半	三
六時	四	六時	四
同半	五	同半	五
七時	六	七時	六
同半	七	同半	七
八時	八	八時	八
同半	一	同半	一
九時	二	九時	二
同半	三	同半	三
十時	四	十時	四
同半	五	同半	五
十一時	六	十一時	六
同半	七	同半	七
十二時	八	十二時	八

番兵の當直割は右左舷各三組、都合六組あつて、其當直日丈晝夜四時間宛八時間立てばよいので、非番の日には兩舷直員となつて他の仕事を

する。例へば今日左舷當直とすれば、右舷直の番兵は番兵でなく、左舷直の番兵三組が八時間づゝ立てばいゝわけである。これは少し込入つて居るから解りにくいかも知れぬ。

先任衛兵伍長と云ふのは、これは艦中下士の最先任者が命ぜられ、副長甲板士官の命を受け艦内の一艦警察の大元、警察署長と云つた格で其他トモの方とホールの方との意志の疎通はこの人を通じて行はれる

取次―三四等水兵あたりの若い兵の任で始終舷門附近にあつて、士官の取次出迎へ、其他の雑用を足す役目、衛兵隊に附属して居る。

従卒―艦長室、士官室、士官次官、特務士官室と分れ、傭人たる従僕給仕と一緒になつて士官の日常、食事の事から着物の世話まで、丁度小間使と云ふ格であるが陸軍のやうに私宅に出入する事はしない。

中下甲板掃除番―先任衛兵伍長の揮下にあつて、中下甲板の掃除整頓の任で、品物を其邊にやりつぱなして置くと、これが來て罰金箱に入れてしまう。罰金箱と云ふのは一つの懲戒機關で一物件に對して金二錢を徴收する。

内舷掛―艦の内舷手入整頓、兼職に分隊の甲板洗要具等の保管整理。

外舷掛―艦の外舷を見廻つて毎日其の手入をし、兼務に甲板砂摺用砂を保管して居る。

守燈番―碇泊燈、艦尾燈、其他電燈に非ざる燈火の受持ちで、十一時の消燈後、神秘的な常夜燈もこの人が點けて廻る。

塗具掛―塗具庫にあつて、塗具を造つたり借したりする役。

砲塔當番―十二吋、十四吋など云ふ大な砲塔内の諸機械を、四人位で

毎日手入をして居る。

水雷艇、小蒸汽艇員―艦載水雷艇、或は小蒸汽等に乗つて陸上との交通を計つて居る役。

厠番―厠の掃除の任、他に休憩の喇叭がなれば下士卒の煙草盆を出すのが役目。

一番厭な役で、艦に依つて横着者を懲戒的にやらせる艦もあるが、最も精勤者を出す處もあるが、後者の方が策の得たものであらう。

艦底掛―最も神秘的な仕事で、毎日蠟燭一本に突鑿一挺を持つて、二重底の中を潜つて歩いては錆を落し、朱色の錆止塗具を塗つて歩くく、何處を見ても朱色の鐵の壁で、蠟燭の火がボーッと點る。物音一つ聞えない中でコッコッと錆を落す。宛然坑夫みたいな仕事で、空氣が惡い爲めに健康を害する事がある。

まだあるが畧すとして、以上は皆甲板士官の指揮監督の下、二ケ月交代位で輪番に誰でも服務しなければならぬ。

附記　番兵とは衛兵隊が勤務に服して居る時、其の一個々々を指して云ふものなり。

海軍俗語彙

●●●お渡り　凡て官給品を意味する。お渡り飯、お渡り服、お渡り帽子『オイ此品はお渡りかい。』と云つた調子。尙從僕、給仕の事をお渡りボーイと云ふがこれはちとひどい。

●●●おさん　これは從卒の異名、つまり飯盛りをするからである。

●●●大學校　艦底係りの異名。監獄を大學校と云ひ、それから轉じて艦底係りが毎日錆止塗具で服を眞赤にして艦底の狹い處に潜つて居るから云ふのである。

勇しき諸操練と雑業

臨戦準備―合戦準備―戦闘―敵艦捕獲―其他―陸戦隊
―水雷防禦及其他諸操練―一心異體となつて―操練の
三要項―雑業

艦の兵隊は毎日何をして暮して居るか？。あれ丈の大な艦である、其の手入保存だけでも大事である。まして其の本務とする處は、其の艦を操縦しつゝ敵と戰はねばならぬ。否戰つて敵を撃滅さして終はねばならぬ。故に當事者が腐心して居るのは茲で、何としたらば艦を良く保ち、敵と對して其の搭載兵器の偉力を發揮し得るかと。

毎日の仕事、は操練と雑業とである。操練とは凡ての演習訓練で、雑業とは艦體兵器の手入其他種々雑多な仕事である。

それも其艦の任務によつて違ふので、常備艦隊あたりとなれば、年度教育訓練と云つて毎日の様に操練を行つて居るが、豫備艦となればそれを艦の修理期間であつて專ら雑業のみである。

臨戦準備――これはサア之から戰に臨むのだと云ふ時行はれるもので兵員の補充、軍需品、石炭、糧食搭載、不用物品陸揚、水線下格納、海中投棄、釣床掩蔽と云つて大砲の圍りや艦橋の周圍などに釣床を吊して彈丸の破片を被ける事をする――戰闘となれば兵員は釣床なんかに寢ては居られぬ。毛布にくるまつたまゝ甲板にゴロ寢である。

合戦準備――臨戦準備を調へて出て行く、敵の所在が判つたと云ふ時或は碇泊中敵が襲撃て來たと云ふ時行るもの、大砲の旋廻俯仰に邪魔になる手摺や前後の旗竿を倒したり、ステイを切つたり、戰闘の防げ

となる物を取のぞき一増戦爭の準備を調へ防火防水の用意もする。

戰鬪―愈々敵の黑烟が見えたと云ふ時、こゝで各員は戰鬪配置に就いて彈丸火藥を備へ命令一下を待つ、軈て戰鬪旗が大檣にスル〳〵と揚がると云ふ段取になる。

敵艦捕獲―船舶臨檢拿捕回航――敵は白旗を掲げた、と云ふ時、捕獲隊を出して之に我軍艦旗を揚げ回航する。また敵商船を臨檢し拿捕して之を回航する操練。

陸戰隊―砲煩の偉力を以て沈默さした敵の港、要塞を確實に占領し、或は追擊する爲めに派遣する操練。

水雷防禦、水雷防禦網張方、艦內哨戒――共に水雷艇驅逐艦の襲擊に備へる操練。

其他、防火、防水、他艦船火災防火隊派遣、溺者救助、難船救助、潛水器出方、曳船、被曳船、片舷機航行、など擧げ來たれば何程でもある。

以上の諸操練は皆號音號によつて行はれ、『總員足袋を穿け』で足袋を穿い動作を敏活ならしめ、命令一下、直ちに受持ちに仕事に駈付けるのである。如上述べたやうに其數が多い、其の種類によつて、自分のなすべき仕事を一々呑込んで居らねばならぬ。一致協力一心異體となつて事に當らねば其艦の成績は上らない。

艦隊でもあれば、それが旗艦の信號によつて一齊に行はれ、其の遲速を爭ふ。

一に確實、二に迅速、三に靜肅と云つて、仕事を確實にやるのが第一となつて居る。フトした粗洩から一艦の安危に關る大事件の突發した例は

何程もある。艦員としての責任心配はまた大なるかなである。

雑業――と云ふのは全く雑業で、艦の錆落しもやる。雑用縄も撚る。各科倉庫の整頓だとか手入、種々雑多である。

其他、弾丸火薬の積卸、糧食積、石炭積、外舷塗換え、被服洗濯もやらねばならぬ。釣床の日光消毒もタマにはやる、其の間には雨も降れば、海も時化る――難船があつたソレ助けに行け――こんな事は少ないが――と云ふやうな譯で、行動豫定は作つてあつても中々それに依つて方付けて行く事などは出來ぬ。今日横須賀に居ても、明日は最う何處の洋中を駛走て居るか知れぬ。轉變極りなく、浮草を追ふて行く遊牧の民と云ふのではないが。命令一下で何處へでも出懸けて行かねばならぬ、之が最も海軍の特色でもあり誇りでもあり、また面白味でもある。

『食事用意』と『酒保開け』

飯を炊く兵隊――食器――食卓番――下士卒一日の食料――所謂十毎一の法――嗜好食――菜漬の一壺に隨喜の涙――酒保で賣る品物――酒保の組織――

食卓の組織に就いては前に述べた。茲では食事に就て話しする。

先づ事業止めの甲板掃除も了つて、『煙草許し』の喇叭も鳴つた。手を洗つて食事の用意をする。一人は食器を拭く、一人は茶鍋を持つて茶を酌みに行く、食事用意にはまだ五分ある早く喇叭がなればいゝなア、と配食棚の前に立つて待つて居る――其中には飯鍋と汁鍋とに各卓の人数丈の分が配食されて入れてある――。

飯を炊く兵隊は毎日飯を炊くのが專門で主厨と云ふ――左腕に鍵のマ

ークが付いて居るのがそれだ――。

扨、食事用意が鳴ると、各卓鍋を持つて來て、各自の食器に當分して食ふと云ふ順序、食器は瀬戸ひきの金椀で、飯、汁、茶と三個づゝある

この配食、食器鍋を洗つたりするのを食卓番と云つて、卓の一番若い兵が自分から任ずる。これは昔からの仕來りで、次の新兵が乘つて來るまでは遣らねばならぬ。

朝は味噌汁、晝は牛肉と野菜、夕は魚類と野菜、陸軍の樣に御馳走日と云ふのはないが平常の食物がまづ中流と云つた形――飯は無論麥めしであるが――。

下士卒一日の食料

朝　米五十匁　麥十七匁　その外に味噌汁漬物

晝　米五十匁　麥十七匁　野菜六十匁　獸肉六十匁(骨付)

夕　米五十匁　麥十七匁　魚肉四十匁(骨付)　野菜六十匁

パンの時は五十九匁と砂糖四匁

註　十人毎に一人分金給でてるからこの中から十分の一を減ずる譯である

一食分金に交えると九錢宛、一日二十七錢となる。で凡で品給で、旨いまづいは、厨宰主厨の庖丁加減一つ、生糧品は軍港に居れば毎朝、傳馬船で衣糧科に取りに行く。それから凡て品給ではあるが、十人毎に一人分は金で給される、之が朝の味噌汁となり、毎食の漬物代となる。之も嗜好食委員と云ふ者が定められてあつて、毎朝衣糧科を經て商人から品物を買つて來る、經濟に遣つて行けば毎日何錢宛か殘つて行く、それが正月の御馳走となつたり、石炭積のお汁粉の御馳走となつたりする、

これは艦によつて勝手である。

それで外國に行つたり、戰爭となつたりすれば、食料も上り、食物も良くなる、長い〳〵航海となつて、生糧品がなくなり――肉類などは冷藏庫にしまつて行くが――毎日罐詰や乾物類、ビスケット許りなると實際コタへる、港に入つて久し振りで何より喜しく思ふのは青い野菜類である。全く大根の一切、菜漬の一莖に隨喜渴仰の涙を垂らすと云ふも虛ではない。

酒保――、激しい一日の仕事を了り、釣床も卸して了ひ、サア之から自分の身體となつたと云ふ時、酒保に行つて一杯の酒、一袋の菓子に一日のうさを霽らす其の樂しさ。また會心の友と打集ひ、御茶をいれてなど云ふ贅澤は出來ぬが賄に行つて湯をくんで來る。阿彌陀もよし、持合ひもよし、勝手な事を語り合ひ乍ら、アンパン、羊羹の縱嚙り、それ髯が泣きます、お年も考へろと、誰も云ふ者もない茲は軍隊と云ふ別世界、一團の人が親であり兄弟である、誰に遠慮もいらぬ。永い航海となればこれが唯一つの樂みとなる事は事實、色氣も拔いたらさて食氣に集るのは人間の野性で、あゝ思ひ出すのは海兵團新兵の頃である。

酒保で賣る品物、日用品は凡てを蒙羅、、休暇前になれば御土產品の二品三品、鞄、信玄袋などまで賣る艦もある、飲食物では、酒、ビール葡萄酒位、甘黨でアンパン、大福餅、ビスケット、羊かん、夏になればラムネ、サイダーも賣る、其他には罐詰類もある、一人宛、酒一杯、菓子二袋以內位になつて居るがなか〳〵それでは足りない。各卓で通帳が出來て居るが傳票で以て買ひ代金は月末捧給を貰つた時、卓長が

集めて之を拂ふ。

その組織はと云ふに、酒保委員長に分隊長一名位が交代で任じ、其下に下士卒五六名位の委員付が矢張二ケ月交代位で係りとなつて、毎日其事に當つて居る、物品の價は無論仕入價で分るのであるが其處に何程かの歩合をとる。それを基金として殘つて行き、或は、臨時に下士卒全體として何かしやうとする事、例へば僚艦の下士卒の葬式に贈る花代だとかそんなものがこれから出るのが通例となつて居る。

酒保と云つても、人の少い三等驅逐艦以下には無いが陸上の商店と特約して置いて酒保の代理をさせて居る艦もある。

『上陸用意』の喇叭の嬉しさ

上陸の運い艦は元氣がない—入湯上陸と半舷上陸—散歩上陸—上陸割—泊り番と歸り番—軍服に着更える心地—上陸員の點檢—上陸札—海軍下士卒集會所—海兵の下宿生活—公平なる組織—克働克遊主義—海軍の美點—

人間と云ふ者も到底は陸の上で生れた代物で、二十年三十年と海上生活を續けて來たならば、魚の眞似は出來ない迄も、兩棲動物の心持位になるだらうと思はれるが奈何して〳〵、陸の事は一日も忘れ得ない。緑の色、土の臭ひ、長い航海でもして陸に上つて來ると、あゝ故郷よ！と云ふ心地になる。何事も遠く離れて居ると其缺點が目に見えず、其長所計を思ひ所謂美しい幻像と云ふものを勝手に作つて喜んで居るから、

其本物を見て、暫くは美しく見えるのであらう、船乗の家に不知がないと云ふのは茲で、甚だ御目出度い事である。

海兵に於ても同じ事、まして目に見えて苦痛は感じぬ乍らも軍規に縛られて居るのだと思ふと肩が張る。少時でも自由の天地を濶歩したいと云ふ氣になる――それで居て少しも艦を嫌だと思ふのぢやない――

上陸の遲い艦は元氣が無いと云はれるのは茲で、兵員は上陸さへ一分でも早くさして遣れば喜んで、身を粉にしも働く。

軍港などで海兵が夜となくゾロゾロ歩いて居る。奈何して夜でも何でも澤山の人が上陸して居るのだらうと不審を起すであらう。

海軍の上陸は、入湯上陸、半舷上陸、散歩上陸と三つある。、入湯上陸と云ふのは、文字通り、湯に入りに上陸するので、それは夕明朝食事用意まで許される、これを泊り番と云ひ其夜の定時までに歸るを歸り番と云ふ。

散歩上陸、と云ふのは軍港に非ざる港や、島に行つた時、半舷宛、或は四分の一宛、交代で散歩する事である。

事業止メがあつて、甲板掃除がすむ。

『オイ馬鹿に御丁寧に手を洗ふな……ハハア上陸だな。』

『願い升よ、……こんな良い天氣に艦に居る人と違ふんだから……。』

『鷄だらう？。』

『ヘン御氣の毒樣、ちやあんと待つてる人が……』

『何ッ……。』甲板をドタバタと、上陸人の心は浮々して居る。

『サア上陸人は上陸用意をして呉れ、食事用意は俺がするから。』と舊

食後から、明朝食事用意まで許されるのであつて、次の様な割になつて居る。

下士及善行章二線以上を有する卒　隔日上陸
善行章一線を有する卒及一等行狀の者（一ヶ年）　四日目上陸
一等行狀の者（一ヶ年）　六日目上陸
三等行狀の者（一ヶ年）　半舷上陸のみ
假三等行狀の者（六ヶ月）　海兵團にて新兵の時半舷外出但し引卒
四等行狀の者　懲罰に觸れ降級せしめられし者上陸なし

注意　行狀の下の數月は停年を表す、即ち新兵として入團より善行章一線を得る迄に三年六ヶ月を要す

半舷上陸、と云ふのは土曜日曜大祭公暇日　晝食後から午後七時迄―夏は七時半――まで許されるもの、入湯上陸の番に當つた者は續いて兵もこの時許りは自分から食卓番となつて、新兵達に上陸用意をさせる汚れた事業服を脱いで、上陸用の良い軍服に着更ゐる心地？、遭曳に行く小娘の心と云つたやうにソワ〳〵と顫えて居る。

『今日は逗子に行かうか？。』

『衣笠公園に行かうぢやないか。』

いや活動寫眞だ、芝居だと、勝手に黨を組んで豫定行動は出來てしまう

『陸に行けば食物も有るんだ。』と許り、何時もペロリと食つてしまつて未だ足りないやうな顏をして居る連中も、生意氣にパンの柔い處丈けを食つて、

『願升と！』出て行くのも正直者だ。

『願升。』『行つて來たまへ。』が交される。

『歸りかい？泊りかい？。』とは在艦の者が、歸番なら釣床を釣つて置いて達ると云ふ意味で訊くのである。

上陸員整列の號音がなる。上陸員は後甲板に整列てて當直將校から服裝携帶品の點檢と上陸後の注意を受ける。當直將校の常套語とて先づ、

『只今から半舷上陸を許される。歸り番は今夜の七時まで、泊り番は明朝食用意迄、迎へのボートは共に十五分前に陸を離す、上陸してからの注意は何時もの通り……乘艇。』となつて、先任衛兵伍長が乘艇區分をなし、出發する。――上陸札と云つて自分の姓名を書いた小札を出し、歸艦の時は受取る――

槽打つ手も勇しく、艇が並べば競爭となるのは通例で、まして上陸の時だから溜らない。他艦のならば尙の事一刻も先へと汗みどろになつて漕ぐ漕ぐ。實際一艦隊あたりの上陸人が大小の端艇に乘つて波止場を指して漕いで來る光景は、なかなか壯觀である。

波止場に着けば端艇を捨てゝ三々伍々、思ひ〳〵の心は思ひ〳〵に散つて行く、宛然蜘蛛の子を散らしたやうに。

自分の軍港に居れば、上陸してもさう町をブラブラやつては居られない。勢ひ根據地、休養所を求めなければならぬ。と云ふ處から軍港要港部等の何處にも海軍下士卒集會所と云ふ倶樂部があつて、其經營費として卒は四錢、下士六錢宛毎月出して居て、風呂は無料、寢臺は三錢で安々と寢られ、食堂娯樂室展覽室等も完備して居るのだが、人々はその官臭を嫌ひ、より自由な家庭的な下宿生活を好んで、海兵の凡ては其所轄

軍港に下宿を一個宛有つて居る。で集會所は專ら他所轄艦乘組の者の休養所になつて居る。或は其目算で造られたのかも知れぬが――。

其下宿は素人下宿で、職工の家が多い。先づ上陸して來れば第一に入湯して來る。それから着物でも着更へて家の女房さんが茶をいれてくれるを呑む、雜談に散歩に讀書に思ひ々々に樂しい上陸の意味を果す。

横須賀で其下宿料は一定して居らぬが概して隔晩一圓、四日目七十錢六日目五十錢、泊りを貫はぬ四等卒は半舷上陸の時のみで、先づ三四十錢位、食料一食十五錢が通例で、四日目上陸の者下宿へ一ケ月の拂、壹圓貳拾錢乃至壹圓五拾錢位の處である。

海軍位其組織が完全して居る處はない。上陸などでも、誰でも一回も損をするやうな事はない、陸軍では日曜の番兵に當つた者とかは外出する事は出來ぬのだ相だが、海軍ではそんな事は絶對にない。

それは當直、非番直と云事の界がよく定つて居るからで上陸は其非番直の者がするのである。人を使ふにも當直の者から先に使ふようにして居る、少し時間が長引く艦外の仕事に行く時などは『中に上陸番の者は居ないか？、居たら當直の者と代れ。』と云ふ。

朝起きて、あ、今日俺は當直だ。と云ふ事は誰でもの腦に浮んで來る事である。

上陸すれば思ひ切つて暢氣に、面白く遊び。歸つて來れば、また其氣になつて一生懸命に働く。克く働き克く遊ぶと云ふのは海軍の主義である、戰友が上陸せずに居れば、其の理由を訊いて如何も上陸させて遣る士官の側に於ても兵員の上陸しないで居ると云ふことを決して快とし

ない。

また、自分の事は凡て自分でやると云ふのは、海軍下士卒生活中の誇るべき處である。上等兵曹以上從卒の附くのは別として、二等兵曹であらうが一等兵曹であらうが下士であつても洗濯も自分でやれは靴も磨く私用の事に就ては決して下の者を煩さない。之れは當然の事であるが、陸軍生活の話しなどを聞いて、思ひ深いものがある。

海軍俗語

鷄　上陸しても泊らずに歸つて來る者を云ふ、鷄が夕となれば必ず自分のねぐらに歸つて來る處から出て居る。

のしあげる　暗礁にのしあげると云ふ意味から通じて計らずも不淨地に迷ひ込んで青樓にあがること。

潛航艇　もぐる意、即ち闇に跳梁する女の戯名。

俸給日と進級日

附纒ふ船乘氣質—『俸給受取れ』—下士卒俸給額—下士卒諸加俸—一等水兵の小使帳—誘ふ水あれば手風習を打破せよ—進級日—進級申渡—お茶を挽くと云ふ事—進級祝ひ—下士卒進級停年—

金は卑いもの穢いものと排して『武士は食はねど……』と澄しては居られないのは今の世の中である。男として、まして軍人として相當の覺悟準備があらねばならぬ。不幸にして、親が危篤の電報を受けて看護歸省を許されても、五十里百里と遠い處で汽車賃が足りないと云つて、分隊長や先任下士の厄介になるのも、第一人格を傷つける。上陸しても金がない位淋しいものはない。仕方がないから下宿にすくまつて居れば、

それでまづ無事に濟むものゝ上陸の本義はとげられない。

『板子一枚下は地獄』の生活だ、何日死ぬか判るものか、上陸したら盛んにやれ、と、古い艦乘根性が文明の今日まで執念强くつきまとつてゐるもすれば財布の底をはたかせて終つて、月末には何日でも財布は手箱の中に投げ込まれてあると云ふのが少くない。

中には、採算的に海軍に來て活る者もあつて、コツ〳〵と貯めて居て滿期の時はなか〳〵纏めて持つて行く者もある。

金を溜めるの善惡は別として、兎に角、『總員印版用意……俸給受取れ』の號令は、誰の耳にもそう惡いものではないだらう。それは毎月晦日の正午休中に渡される。暫くは艦内中が金で呻つて居る。

酒保の拂、卓費、先月分義捐金が何程、と右から左へと散つて行く。

『あゝ、折角捕へた猪がまた逃ちやつた、』とコボして居るのもあれば『散兵、散兵、財布基準其場に散れ……』で皆な散つて行つちやつたよ。』

『先日の阿彌陀の金を。』などと思はぬ處から取りに來られて、オヤオヤと頭を掻く。

『サア俺に貸の有者は早く取りに來ないと無くなつてしまうよ。』

『今月も豫算超過だ。また外債を募らなくちや、オイ誰か外債に應じないか？。』などゝひねつた事を云ふ者もあれば、

『上陸すればまた下宿でとられるし……今日もまづ懷中時計は生き返らない。』と、

悲喜交々の姿！。

下士卒俸給額

	一等下士	二等下士	二等下士	一等卒	二等卒	三等卒	四等卒	五等卒
甲日額	一級 壹圓	一級 四錢五拾	一級 四錢四拾	貳拾六錢	二十二錢	拾九錢	拾五錢	九錢
	二級 八錢六拾	二級 七錢四拾	二級 二錢三十	貳拾壹錢	拾八錢	拾五錢	拾貳錢	七錢
	三級 八錢五拾		二級 七錢參拾					
	四級 八錢八拾							
乙日額	八錢八拾							

甲ハ定員給、乙ハ補充員給

下士卒諸加俸

種類	區別	日額
艦砲射擊優等章	大口徑砲	五錢
	中口徑砲	參錢五厘
	小口徑砲	貳錢五厘
魚電發射優等章		五錢
汽醸優等章		五錢

通信術優等章		五錢
特技章	砲術、特修科、高等科、水雷術特修科、高等科、信號術高等科、普通科、電信術高等科、普通科、津用術、機關術高等科、電機術高等科、工業術、掌記術、看護術、船匠術、掌厨術、軍樂特修科、專科、	貳錢五厘
善行章	一線	五錢
	二線	壹錢
	三線	參錢
	四線	四錢
	五線	五錢

其他軍艦旗加俸トテ任務ニ服セル艦ニハ日額下士六錢、卒參錢、驅逐艦ハ下士拾錢、卒六錢ノ加俸アリ、遠洋ニ航セバ其經緯度ニ依リテ加俸アリ

で艦隊乘組の善行章一線を有する一等水兵一ヶ月の小使帳を調べて見ると、

酒保拂
日用品

飲食物

洗濯石鹼一本　拾九錢五厘
煙草（サツキ四拾匁）一　四拾五錢
ライオンはみがき　二　貳錢四厘
クロストップ　一　壹錢貳厘
チリ紙　五　六錢
靴下（上）　一　拾貳錢
靴クリーム　一　九錢
小計　九拾五錢壹厘
集合所費四錢
卓費參錢
義捐金參錢
厠番慰勞金五厘
小計　十錢五厘

この位の處がまづ普通であらう。陸軍に比べれば給與は多いが、如上述べたやうに當然の支出も多い。

菓子拾五袋　七拾五錢
ビール一本　貳拾壹錢
パイナップル罐詰一　貳拾壹錢
小計　壹圓拾七錢
合計貳圓貳拾貳錢六厘
下宿拂壹圓參拾錢（食數四回）
總計參圓五拾貳錢六厘也
俸給九圓也（日額貳拾六錢艦隊加俸參錢普行章一錢計三拾錢）
差引殘金五圓四拾七錢四厘也

自分の軍港に居れば下宿もある事故辛捧も出來るが、他の港や他軍港に行けばなか〳〵に金がいる。集會所はあつてもそれは總員の十分の三程も寢る處はない、宿屋に泊れば二十錢が通例である。

變つた港や、名所見學に故郷の弟妹に土產の一つも或は繪はがきの一枚も買ひたくなる。それが辛い航海であつて、久々の上陸でもあれば、嬉しさにまかせて、つい誘ぶ水あれば——氣が大くなつて居るから堪らない、まづ一ヶ月の小使も一夜で〇となる場合が少くない。恐るべし彼等の囊中の見やぶる丈の眸を備へた魔は何處の軍港にも居る。

それでも下宿の古い婆さんなどは

『この節の兵隊さんは皆おとなしくなりましたね。皆さんがなか〳〵考へて居らつしやる。』と。温なしくなつたと云ふ言葉の裏には元氣がな

くなつたと云ふ意味が隠されて居ると云ふ事は爭れない事實である。昔のやうに醉ぱらつて無暗に他人に喧嘩を吹かけたり、無茶な事をして喜ぶと云ふやうな者のなくなつたのは喜ぶべき事だが、何も酒を飲んで亂暴する許りが元氣ではない。軍人としては、さつぱりと意勢よく軍人らしくやつて貰ひたい。今でも東京あたりに行くと、海軍の兵隊とさへ見れば亂暴者、のんだくれとして、喧嘩でも吹かけられてはと觸らぬやうに敬遠主義をとられて居る。これでは何時まで經つても理解される時は來ない。彼等の先輩の作つたこの古い惡い風習を打破し、國民の誤解をといて、俱々笑つて事に從はなければ、海軍の開發進展にも關係するであらう。

進級日――、海軍の進級は五月一日と十一月一日との二回、其の停年を有し進級資格の有者は――――項末參照――二ヶ月前あたりに試驗がある。その頃になると人々の働き振りが違つて來る。平常横着を極め込んで居て、進級なんか欲かない。進級を貰ひに海軍に來て居るんぢやない。などゝ口には云へど、心の裡には内々それを望んで居るのは他人より度が強い、其の期に到つて胡麻を摺り始めた處で追付かない。

『貴樣此頃馬鹿に働き出したぞ』。

『そうさ、進級前ぢやないか。』と、戰友に急所を突かれてあけ開きに戯言らしく云つて居ても、内に野心燃ゆるが如くである。

其日は總員集合があつて、下士以上は辭令を頂戴し、卒は艦長の前に呼び出されて申渡を受ける。主計官が呼ぶ人名の内に自分の名が、最う出るか最う呼ばれるかとピク〳〵ものので、遂に呼ばれぬ内に終りを告

げると、嗚呼萬事休矣、お茶を挽いた事になる。

進級した人達は嬉さ半分、きまり惡さ半分

『お目出度う、お目出度う。』とお祝ひを浴せかけられ

『有難う、お蔭樣で……。』とお茶を挽いた他の友達に對しては氣の毒で何とも申し樣もなく、大な面もされないのは人情である。

『オイ、今日上陸だらう、俺が等級章を遣るから付けて行つて、見せて遣れよ。喜ぶから。』

『ね、御約束によつて一晩おごるんだぜ。俺に進級が來たらきつとおごると睹をした事は忘れやしまひな。』

『今日から××さんぢやなくて、××兵曹と呼ばなくちやならないんだな。何だか變だな。』

『××兵曹、最う水兵服でないんだから、煙草を喫へたまゝ服が着られるよ。』

冷評やらお祝やら、何と云はれても惡い心地はしない。一等卒から三等下士に進級した者は、今日から下級の卒ぢやない。判任官四等の下士官樣だ。上陸も隔晩になる。先づ下宿のお神を驚かしてやらうかな、なぞゝ考へて居る。當分、服の身に着付かぬ内は、帽子の廂がテカ〳〵光り、着物の皺までホヤ〳〵で御座いと云はぬ計りで、薄きまりの惡い事、先づ通りを歩いても、今度からは答禮が多くなる。

其うちに一夜は進級祝ひが行はれる、先任下士を主賓として分隊員一同を招待し、酒保のビヤ、アンパン餅菓子などで、微志を酌んで貰ふ。此の場合最も氣の退けるのは進級の來なかつた連中だが先づあきらめて

他人の進級をお祝ひする。

下士卒任用進級停年

五等卒	六ヶ月（海兵團ニテ新兵ノ教育ヲ受ク）	陸上勤務六ヶ月
四等卒	海上勤務四ヶ月半	陸上勤務八ヶ月
三等卒	海上勤務六ヶ月	陸上勤務八ヶ月
二等卒	海上勤務六ヶ月	陸上勤務一ヶ年四ヶ月
一等卒	海上勤務一ヶ年	陸上勤務一ヶ年四ヶ月
一等下士	海上勤務一ヶ年	陸上勤務二ヶ年
二等下士	海上勤務一ヶ年	陸上勤務二ヶ年八ヶ月
一等下士	海上勤務二ヶ年	

筆記は經理學校丙種練習生を卒業し筆記任用と同等に三等下士となる

海上の水の價値

何の皮肉？何の教訓？——上陸の第一義——顏を洗ふ水ば五合内外——艦の風呂——何れが贅澤か——貴重な蒸溜水——驟雨浴び方——大昔を其のまゝ——雨水の眞の姿——海兵の洗濯——あゝ淡水が欲しい——

滿々と湛へた水、茫々と續いた水平線、其上に棲んで居て水に不自由すると云ふ事は何と云ふ皮肉であらう、何と云ふ皮肉な教訓であらう。海水が鹽分を含んで居る位の事は三歳兒でも知つて居るが、其上に棲んで居る海の强者達が毎日其水の不足に苦められて居ると聞いたら、一寸考へるであらう。

海軍の上陸と云ふ事の第一義も、陸に上つて心ゆく計り水を使ふと云

ふ事である。海兵達は何處の港へ上陸しても第一に探すのは風呂屋である。實際水の尊さは海上生活をして來た者であつて始めて語り得る處のものであらう。水道の栓を捻つてシヤア〳〵とやる都會人、滔々と流れる河水を見馴れて居る田舍人の考へも及ばぬ處である。水に對して非常に小心になつて居る海兵達は錢湯に行つて他人が幾杯かのその貴重な水を、平氣でザア〳〵破つて居るのを見るとヒヤ〳〵すると云ふ。

艦には夫れ相當のタンクがあつて、始終清水を蓄積してあるが、それも入る丈しか入らない。

水を使ふ事は一日たりとも止めて居る譯には行かぬ。軍港に居る時なら水が無くなつたら港務部に請求を出して水船呼びの旗を揚げて置けば持つて來て呉れるが、それも要求する艦は多いし供給する水船は少いから思ふやうには持つて來てくれない。朝、顔を洗ふ水が五合内外、それで顔から頭から手から石鹸を使つて綺麗に洗ひ清める。中々上手な者である。艦では油を使ふから手足の汚れるのは一通りでない、それで手一つ洗はうと思つても水はない。水係と云ふ者があつて水口の鍵を保管して居て、甲板士官の許可がなければ一滴たりとも出して呉れない。であるから乘員も水の儉約に努め、市中なら穢がつて手も入れない樣な水でも喜んで顔も洗ふ。石鹸液が水かと思はれる位、ドロ〳〵になる迄使つて居る。

艦では一周に一度位は風呂がたつ、下甲板に浴室があるが暖い時分ならば、帆布風呂で四角な大な帆布の袋の縁に綱の付いて居るのを上甲板に吊して立てる。無論潮水で、上り湯に着水の一升計りも貰へば大喜

び、時とすると眞水の風呂をたてるが、そうすると、

『ナンダ今日は眞水の風呂か贅澤だなア。』と感嘆して居る。市中の贅澤者は鹽湯だなぞと眞水に態々鹽を混ぜては入ると云ふ。扨々人間は勝手な者である。

長い航海になつて愈々タンクの水が缺乏したとなれば仕方がないから潮水を沸して蒸溜水を取るが、それには大切な艦の食物たる石炭を焚かねばならぬ、一升何十錢と高價なものとなる蒸溜水が何程尊いかは判る。そうなつて來て南洋の熱帶地に入ると毎日樂しみな事がある。それは驟雨浴方である、南洋邊に行くと毎日非常な驟雨が來ない事はない、少ない時で二三回多い時は七八回も來る。それが非常な猛烈で日本の丁度夕立と云ふやうな風で、水平線が茫と見えなくなつたと思ふと兩脚が丁度千石通しを落ちる白米の樣に見える。

『アヽ、スコールが來た〳〵。早く號令が懸らないかなア。』と艦橋の當直將校の方を促す樣に見る。軈て、

『總員スコール浴方』と云ふ奇拔な號令が懸る、待つてましたと計り、眞晝間眞裸體に石鹼と手拭を持つて上甲板に飛び出す、右も左も只波と空、見る人もなければ恥ずる處もなく、只大喜びで躍つて居る。まるで大昔を其儘の光景は陸の人に見せたいと云つたつて出來ない事だ。

アヽ良い氣持ちだ、嬉しいと飛んで歩いては居られない。非常な短時間に通り過ぎる雨であるから其の間に石鹼を洗ひ落さねばならぬ。甲板の上に踏ぞり返つて、瀧にでも打たれるやうな心地で背や腹を打たせて居る心地、何にたとへやうか？。

雨が通つてしまへば、又元の上天氣で灼熱した太陽は雲を出で、其の邊り大雨の跡、砲身にたまつた水玉をキラ〳〵照しだす。

『アヽいゝスコールだつたね。』と人々はまた元の仕事に取懸る。

時に依つては、來ると見たスコールに逆轉をされて背負投を食はせられる事がある。來る來ると計り皆裸體になつて待つて居る。氣早な連中は最う全身に石鹸を塗たくつて居ると、雲はつと側に切れて、オヤ〳〵此の石鹸をどうしやうなと云ふ滑稽も演ぜられる。非常に澤山な雨量で舷側から瀧の樣に流れ落ちる樣な事もある。其樣時には之を取つて洗面水にする。

雨水と云ふものは薄茶色を帶びて居るものと子供の時から不用意に思つて居た者は、茲で始めて雨水の眞の姿を見るのである。それは空氣が清潔で、降る度數が多く、空中の塵埃と云ふものがないからかくは綺麗なものなのであらう。南洋では皆之を飲料として居る。

話は餘事にはいつた、其樣に水の少い中でも洗濯もやらなければならぬ。海軍の規定された洗濯日は毎週、火曜日と金曜日とで朝食後から始める。その前に洗濯繩は前檣の桁から艦首に向つて張られる食卓番は洗濯桶へ水を取りに行つて卓毎に分けて置く。

『總員被服洗濯始め』で洗ひ始める。所用時間は四十五分位。其間に一人分僅々五六升の水で、事業服一着に襦袢袴下靴下位を立派に洗ひ上げてしまう。海軍の洗濯は水で洗ふのではなくて石鹸で汚れを落し、水はその石鹸の氣を滌ぎ出すに用ゐるものである。新兵の内は中々旨く行かず、舊兵より數が少くても時間が永く懸りそれで綺麗にならぬ。これ

でも一骨折らねばならぬ。

號令で洗濯を止めてこれを干す。海兵の服や襦袢の側の下の隅に小い穴が二個宛明いて居る。これは洗濯して干す時其穴にクローストップといふ細紐を通して洗濯綱に結びつける爲めのものである。

よく、碇泊した軍艦のマストから前甲板に斜に、白くヒラ〳〵潮風に飜つて居る洗濯物を見るであらう。そればかく海兵達が苦心して洗つた自分達の着物である。

あゝ淡水が欲い！、この海水がみな淡水であつたら？。

もし誰かゞ、この海水を其儘淡水に化す法を發明したら、何程海に棲む者は幸福を有するであらう！。と、海の面を睨めてつぶやく海兵達の心は、眞箇に眞目面なのである。

土曜日と日曜日——端艇競漕

大掃除—日曜日—分隊點檢—人員調査—休日の午後—艦上の相撲と遊藝許し—大祭祝日—端艇競漕—海軍で使ふ端艇の種類—實用の爲めの競漕—猛烈な應援—

土曜日は大掃除日で、艦内大掃除が行はれる。甲板の砂摺から、中下甲板の洗ひ方——普通中下甲板はリノリユーム張である。食卓は石鹸洗ひ、食器、鍋も砂摺をやる。其他手箱——各自の日用品の入つて居る小な箱——帽子罐、釣床、衣嚢、靴までも上甲板に上げて日光消毒をする其間に必ず防火教練が行はれる。

午前は大掃除日課手入で了つて、午後は半舷上陸、在艦の者は雜業と

云ふのが通例で別科は軍歌、一同後甲板に集つて唄ふ。

日曜日は日曜點檢と云つて、分隊點檢、人員調査と云ふのが行はれる其他にも艦内點檢、武器點檢、被服點檢、端舟要具點檢など云ふ諸點檢は重に日曜か土曜日の午後等に行はれる。

分隊點檢と云ふのは、艦長が兵員の容儀姿勢等を點檢せられるので、兵員は最上最良の服を着けて整列する。『帽取れ』だの『メス開け』などゝ云つて點檢する。

人員調査は兵員の容儀姿勢に加ふるに擧動敬禮等の點檢である。

午前はそれで了り、午後は昨日艦に居た半舷の者が上陸する。在艦員は、一時十五分に甲板掃除があつて、それから『總員被服縫繕』と云ふ號令が懸る。この號令は絶對的の命令ではなくて、被服縫繕でもやりながら休めと云ふ位の意味なのである。衣嚢を擔いで來て整頓に懸る者もある。袴下の破れを一生懸命に繼いで居る者もある。本を讀む者、手紙を書く者、散髪をし合ふ者、其うちに『武技許す』の號令があれば、同好の士と申合せ、上甲板で、撃劍、柔道、銃劍術と思ひ〳〵。時には相撲が始まる、土俵場は、柔道の疊を敷き其上に、防水蓆と云つて、艦に損所が出來た場合それをあて、浸水を防ぐ、麻で造つた厚い毛の生えた蓆がある。それを敷いて、周圍に圓く釣床を置くと立派な土俵場が出來上る。艦によると揮から、軍配團扇、行司呼出しの衣裳まで一揃そろつて居る艦もある。

それも夕食までゞ、別科には矢張り軍歌、航海中でもあつて『遊藝許し』でもあつたらそれは騒ぎで。浪花節やら義太夫やら、思はぬ人の思

はぬ隱し藝に、アッと云はせられる事もある。

大祭祝日紀念日等は日曜日課に準じて、午前遙拜式、紀念式等が行はれて、午後から半舷上陸があるのは同じ事、紀元節とか、天長節とかには端艇競漕が行はれる。

水兵と端艇！、山なす怒濤を乘切つて行く勇しい端艇の姿！、それは海國男兒の理想であり誇であらう、海軍で使ふボートには種々あつて、最大がランチで十八人位で漕ぐのもある。次がピンネース、で十四人乃至十六人漕、カッターは十二人、キグは六人乃至四人、ジンギと云ふのは盟見た樣な格好で一人で漕ぐものである、――カッター以上双座艇ギク以下單座艇で重に驅逐艦に積んである。

競漕に用ゐられるのはカッターにギクで、競爭用として別に有る譯ではないのだから、輕いのはバラストを積んで平均をとる。艦では乘員の中から猛者連を選り出し競漕艇員として作つてあり、競漕のある三ケ月位前から毎日々々練習して居る。

各鎭守府、各艦隊には夫々優勝旗が作つてあつて、毎年其爭奪戰が行はれる。兎に角海軍の競爭は隅田川で行はれるやうな、あんな生優しいものではない。皆荒波を潛つて來た連中計りであるから頗る猛烈を極めたものである、競爭の時は其艇に審査官が一人宛乘つて居て懸け聲一つ懸けるを許されない。競爭の爲めの競漕でなく、實用の爲めの競漕と云ふ意味を含んで居るので、各自は眞面目に、我艦の名を思ひ、最も嚴に、靜肅に行はれるのである。

其朝、艇員は艦總員の拍手に送られて右舷々門から靜に乘艦する。『勝

て來て呉れ。』『しつかり賴むよ。』と云ふ戰友達の言葉に對して『大丈夫優勝旗を擔いで、再びこの舷門から昇つて來る。』と無言の裡に深い覺悟の色がその顏に現れて居る。――勝つた時は再び右舷々門から堂々と歸つて來るが、敗けた時はスイギングブームと云つて端艇を繫ぐ處からコソ〳〵と這ひ上らなければならぬ――。

愈々艇が列び、審判員が、赤前、白後と、寸分の違ひもなく整頓させる。機熟し、號砲一發に出發點を切る。其應援が大したもので、我艦が赤であれば、信號の旗、赤毛布、赤色の物は何んでも持ち出して振る。鍼力罐を叩く、傳聲器で怒鳴る。艦橋と云はず、砲塔の上と云はず、ワイ〳〵〳〵處の騷ぎではない只ワーッ〳〵と云ふ喊聲ばかり、自分の艦が勝ちでもすれば總員嗄聲になつて了ふ。

取進んで、最後に、選手の競漕となり、優勝旗は愈々我艦のものとなり、長官からそれを受けて、艇長が持つて堂々と凱旋して來る、總員は之を出迎へて、舷門を上つて來たら最後、方端から胴上げをして了ふ。

かく勇しい端艇競漕は、其艦の元氣の消長を遺憾なく現して居る。その元氣の消長は、我海軍の武威に關係するので、艦員が熱狂するのも無理はない。

端艇競漕は我海軍の誇の一つである。

艦の『一日』

多岐な水兵の仕事―總員起しまで―忙しい朝の十分間―甲板洗ひ方―艦内の禮―賑かな朝食後―軍艦旗揚げ方―海軍々人覺悟の基礎―日課手入―其日の仕事―軍事點檢―別科―『一日の終り』―初夜巡檢―波の音を聞きつゝ―軍艦の週課―

海軍なるものが世の中に理解されないと云ふ事は、陸軍と違つて其活舞臺が洋上であり、且一般國民との接觸の度が少く、また組織、業務の複雜多岐に亘つて居ると云ふ事が其の大なる原因であらう。

一個の水兵としても、船頭として櫓を押す事は本業の部として、陸戰隊として陸戰の要務の一通りは心得て居ねばならず、塗具を使つてペンキ屋もやる。綱具を扱つて船具屋の仕事もやる。石炭積では人足以上の事をやる。陸軍が新兵で入つた中隊で滿期まで飯を食ふのと違つて、年に二度の補充交代には、命令一過直に蝸牛の如に自分の全財產を背負つて何處へでも行く。日々の仕事も、多種多樣で、一寸軍艦を拜觀に行つて、水兵達の行動を見ても何が何だか判らない。

で、其參考の爲めに、艦の一日を朝から晩まで順を追ふて書いて見る斷言つて置くが一日の生活と云つても、夏と冬とは違ひ――冬は殆ど夏の一時間遲れ――艦の種類、任務に依つても違ひ、航海中と碇泊中とも差はあるが、茲には任務に就いて居ない軍艦――豫備艦――の冬期日課に依つて水兵部の事を說明する。尙艦々の內規によつて多少の差はあるが骨子とする所は同である。

艦で一番早く起るのは鑵の當直の機關兵である。午前一時頃には起きて點火する。それは蒸汽を作る爲で、蒸汽は發電機の原動力となり、賄所の飯を炊くスチームとなり、士官各室の暖爐へ通り――艦内兵員の爲めの蒸汽暖爐の裝置はあつても極々寒い日でなければ蒸汽を通さぬ――諸機械の運轉、諸々の需要に供給される。次に起きるのが當直主厨、お三どんが起きてお釜の下を焚き付けると云ふ格で、二時には起きて朝食の用意をする。三時四十五分には三直番兵が交代し、四時、五時となると、各室の從卒や守燈番が起きて受持ちの仕事――從卒は室の掃除や、士官の朝食の用意に取かゝる。其他早く起きる必要のある者は『何時起し』と書いた札を自分の釣床に下げて置けば受持番兵が起して呉れる。

總員起し十五分前になると、電燈が點き、番兵は受持區劃内を『十五分前……十五分前』と低聲に報じて歩き、時鐘番兵は、當直將校に屆けて副長甲板士官を起す、其他先任衛兵伍長、掌帆長屬、釣床掛が起きる。

午前六時、四點鐘と共に『總員起し』の喇叭が冴々と寒い朝の空氣に鳴り響く、サア、温かい毛布のぬくもりが何程惜くともつらい後朝の別れである。枕にして居た服を着て釣床をキビる。續て懸る號令は『總員釣床納め』『昇降口、武器覆取れ……天窓開け』『休め……煙草許す』兩舷直上甲板洗方』。以上の六つで時間は僅に十分間、其間に命ぜられた仕事を終らなければならぬ。受持は定つては居るが中々日〻廻る忙しさ其間に愛烟家は朝煙草の一服も喫ひたい。甲板士官は恐い顔をしてノコ〳〵廻つて來る。といふ譯だから若い兵隊達は大概總員起しの無いうちにコソ〳〵起きて跣足になつて甲板洗ひ方の用意をして居る。六時十分

頃には兩舷直整列して上甲板洗方となる。先づ水を撒き甲板洗刷毛で一團となつて摺つて行く、『甲板流せ』で流し、『甲板拭へ』でソープと云ふ古麻繩をほぐして作つた大な房のやうな雜巾で拭ひ出す。まだ明けきらぬ軍港の朝、寒い北風は凪いで居ても、甲板に置いた眞白な霜、其上を素跣足で意勢よく家鴨の子の群のやうに這つて行く、冷い辛いは超越しなければならぬ。それは市中の人の大半はまだ暖い床の中にモヂモヂして居る七時頃迄には終る。七時前になると上陸人がゾロ〳〵歸て來る。『イヤ有難う』『お早う』が交される。――艦内では下士以下は朝食迄の間に朝の禮を交す丈けで一日中敬禮の交換はやらぬ――。

七時食事用意續いて食事『士官衛兵釣床納め』――で當番釣床を納める。士官と昨夜十時以後當直した衛兵從卒等は總員より一時間後に起きる。朝のお味噌汁の旨い事。終つて軍服を小倉のやうな薄い白い事業服に着更える。――朝食後令なくして當直が代る昨日右舷なれば今日は左舷――八時迄の一時間は食後の休憩で本を讀む、靴を磨く雜談に勝手々々。

『オイ昨夜の行動は？　大分怪しいねむ相な目付をして居るぜ……。』

『イヤ、昨夜は活動寫眞さ谷川館の……で直ぐ下宿に歸つて寢てしまつたよ。』

『どうだか？……』

『まア考へて見たまへ、今日は何日だと思う二十五日ぢやないか……そう石炭が續かないよ。』

『石炭缺乏行動取止めさハハハ。』

と暢氣にまづ昨日の上陸八が艦の中を賑はせる。七時四十五分診察、身體に恙の有者は願書を出し、診察を受ける――月に一回月例疾病檢査と云つて總員の身體檢査もある――。八時五分前になると『信號兵呼』『總衛兵禮式』の喇叭がなる。傳令はバイフを吹き『軍艦旗揚げ方……』と怒鳴つて歩く。信號兵、衛兵隊は衛兵司令の命に依つて艦尾に整列する。艦長航海長當直將校は時計をもつて艦橋に立つ。八時となれば『揚げ……』と云ふ航海長の命に依つて軍艦旗は艦尾旗竿に靜々と上つて行く、其間信號兵は君ケ代を吹奏し、衛兵隊は捧銃の敬禮を行ふ。其時上甲板以上に在る者は各自艦尾に向つて擧手の敬禮、中甲板以下に在る者は立つて姿勢を正す。一日中でこの朝の軍艦旗揚方と、夕日沒と同時の軍艦旗卸方とが最も峻嚴を極めたものである。一日に二度づゝ、海兵はこの『國歌』に對して國に對するの意識を新にし、でそれがまた海軍々人としての覺悟の基礎をなすのである。市中の人が艦に來て、よくこの場合に出會し、嚴肅の氣に打たれてマゴ〳〵するのを見るが、『國歌』の吹奏を行つて居ると知つたならば、脫帽相當の敬意を表するが當然であらう、――もし艦が艦隊の旗艦であつて、軍樂隊が乘つて居る場合には、信號兵は軍樂隊と代るのである。

軍艦旗揚げ方が了ると同時に『中下甲板拭掃除』の喇叭がなる。以下『小銃手入』『上甲板の木金具磨き』『武器手入』を日課手入と云つて、朝の甲板洗方と共に、特別な業務のない限り雨が降らうが鎗が降らうが、日曜であらうが元日であらうが、天が上に地が下に其の位置を變えぬ限り毎日行ふ手入である。時間は一時間と二十分位。終つて十五分休憩九

時半頃から其日の仕事に懸る――規定は夏季八時四十五分、冬季九時十五分就業となつて居る――。艦には行動豫定が作つてあつてそれに依つて行はれる。今日は一般操練とか、雜業とか種々である。

就業の號音に續いて、水兵部員、或は兩舷直員整列の號音がなる。水兵部員とは水兵部全部の事、兩舷直とは諸役員をのぞいた殘部の水兵部員の事である。其日の仕事によつて人手を多く要する場合は水兵部員を用ゐるが、雜業なれば兩舷直だけを使ふのが例である。之は副長の權限にある。――操練の時は總員――。

さて、兵員は後甲板に分隊順に整列する。分隊先任下士は人の揃つた處を見て、『何分隊宜し』と副長に報告する。副長は各分隊整備を見て其日の事業割をする。事業簿と云ふものがあつて、甲板士官、掌砲科、掌水雷科、掌帆科、船匠科、と各科の長は必要人數を記入し豫め副長の手許に出して置く。で人割が濟むと各科は貰つた人を連れて行つて仕事にかゝる。外舷にブラ下つてコツ〳〵とカンカン虫のやうに錆落しをやつて居る者、甲板に座つて帆布を縫つて居る者、雜用繩を撚つて居る者、いろ〳〵樣々――各科受持ちは一艦一家族の項に述べてある――。其他倉庫の整頓、古物の還納消耗品を受取に需品庫に行つたり。兎に角あれ丈けの大な艦、人が多ければ、それ丈け仕事も多い。

午前の仕事は十一時半迄、其間に十五分の煙草休みがある。『事業止め』『甲板掃除』、一先仕事を片付けて各自座敷箒を持つて來て甲板を掃く。十一時四十五分に晝食、それから一時十五分の就業までは自分の體である。午後の事業は概ね午前の續き、間に十五分の休憩もあつて、三時半

止業、三時四十五分の夕食、『入湯上陸用意』で上陸番の者はイソ〳〵と手や顔を洗つて上陸用の軍服に着更える。五時十五分上陸人整列。

『願ひます……願ひます。』て後事は在艦の者に托して上陸して行く。

五時半甲板掃除、同四十五分に軍事點檢がある。各員は其戰鬪部署に就いて點檢を受けるのであつて、朝夕の軍艦旗揚卸と同く、自己の職務に對する意識を呼び起し、自分の死場所を心に銘せしむる一つの手段であらう。それは十分も要らず、續いて別科に移る　別科は體操とか銃劍術手旗信號端艇漕法、一寸した操練などで、時間は日の長短に依つて一定しない。『別科止め』『ポートホール通せ……揚げ方用意』で各端舟を固有のダビットに揚げて了ふ。

日沒と同時に軍艦旗が卸りる。『總員釣床卸せ』『昇降口覆かけ天窓閉め。』で夜をまつ狀態となり、『第一種軍裝に着更え』で事業服を軍服に着更えて居る間に『酒保開け』の喜しい號令が懸つて來る。『釣床卸せ、』と『酒保開け』矢張りこれが一日中で一番愉快な嬉い號令である。つまり『一日』が終つたと云ふ保證だからである。『一日』に疲れた體を休めよ、安息の眠りに入れよと云ふ福音だからである。思ひ〳〵に打連れて酒保は賑ふ。手紙を書く本を讀む、其處此處に湧く談笑の聲、和氣靄々の樂しさは矢張り夜である。

七時半甲板掃除、同四十五分巡檢用意、八時副長の初夜巡檢がある。用のない者は一先づ釣床に入つて寢た振りをして居る。受持ちのある者はそれ〴〵點檢を受る。賄所、各室食器室、厠等、副長は一々點檢して不整頓だつたり、掃除が行とゞいて居なかつたりすれば、お小言を頂戴

する。巡檢が終れば副長は其安態を艦長に報告する。『煙草盆出せ』があつて、それから用のある者は起き、或は書をよむ。十一時まで電燈は點いて居て、其後は石油の常夜燈に代る。帆布の釣床に蘇蒲團、三枚の毛布は人々の夢を包むに充分である。舷窓から見える幻のやうな海の灯！舷側を敲く波の音を聞きながら、疲れた五體は安かな夢に入る。

『一日』はかやうにして終る。無事に一日の任務を遂行した安心と、喜びと、知らぬ間に四年の歳月を積んで行く。辛いやうなものゝ、樂しい艦の生活は何時までも、忘れ得ぬ一つの思出として殘つて行くのである。

如上述べた一日の作業も、毎日同じ事をやつて居るのでない。單に一つの例に過ぎぬ。其間に被服の洗濯もやる。釣床も一ヶ月一回位は乾す其他大掃除諸點檢も行はれる。それは軍艦の週課と云ふものが定つて居てそれを標準として行はれる、それは如次。

日曜日　分隊點檢、人員調査、艦内點檢、分隊講話として精神教育、諸法規の説明等で、午後は半舷上陸、被服縫繕ひ。

月曜日、基本教練、部署教育で諸種の操練が行はれる。

火曜日、被服洗濯、部署教育等。

水曜日、月曜日と同じで夜間に探照燈の點燈試驗を行ふ事になつて居る。

木曜日、寢具乾方（毎月冬は一回以上夏は二回以上）身體檢査（月一回）部署教育或は船體兵器の手入。

金曜日、被服洗濯、端舟大掃除でボートの砂摺をやり、其他諸倉庫の大掃除、船體兵器の手入或諸點檢。

土曜日、艦内大掃除、防火教練、午後半舷上陸、甲板要具點檢、船體兵器手入。

祭日、紀念日等には日曜日課に準じて、事業服に着更へず簡單に日課手入のみを行ひ、遙拜式或は紀念式其日に關する講話等が行はれる。

海軍笑話

英語を本位とする海軍でも、通例英語で判る言語を、必ず日本語で云ふのがある。シヤポンを石鹸と云ふが如きがそれで。田舍のお婆さん曰く『うちの悴は海軍に行つてハイカラになつて困りもんだ。シヤポンと云やあ判るものを英語を使つてせつけんだなんて……』

元氣の消長を表す石炭積

人足ではない—煙炭の一個にも—元氣皷舞の一手段
—百鬼夜行の姿—あゝ眼が開いた—石炭積みの序幕
—前進の喇叭で—石炭積感念—煙炭と和炭—一家眷屬には見せられぬ—元氣消長の表れ—

毎日何十噸宛も煙にする軍艦の石炭、その額も大したものであるが、その積込も大に勞力を要する。よく軍港で見る者もあらう、艦の舷側に棧橋を架けて眞黑な着物に、眞黑な顏をして一生懸命に石炭を艦に積込んで居る姿を、あれは人足でも何でもない、立派な帝國の海の强者達である。

聞く處によれば、兵隊が石炭を積むのは日本の海軍計りだと云ふ。で、